立教大學新聞

月刊（十日發行）

購讀料一年分送料共壹圓
廣告料十五字詰一行三十錢
（場所指定三割增）
編輯兼發行人　中曾根正三郎
東京市豊島區池袋立教大學內
發行所立教大學新聞部
振替東京七〇八五二番
電話大塚(86)六九七五番

民族青年情熱

戰雲と彈雨の激しい人類の闘爭の中から新しい黎明への胎動の過程が繰擴げられて行きつゝある。東亞共榮圏の確立と世界新秩序建設の我が島國の偉業は赫々たる皇軍戰果の擴張と共に堅實なる一歩々々を踏み固めつゝあるのである。暗澹たる戰雲の切り開かれるところ、美しい光に充ちた大空の姿が、人々の心の中におほらかにゆたかさをあたへんとにじみ出て來る。光は東方よりの言葉は、我々日本民族の意識の上に高い響と強い使命感をもつて曠古の偉業完遂へと邁進せしめるのである。

轉換期と云ふ言葉はかうした激しい胎動の中にひそむ言葉である。そしてそこには歴史的な飛躍が存在してゐる。歴史的な現實の示すところ轉換への相貌は弾められつゝある。時代は民族の運命をのせて、地球の廻轉と共に無數の葛藤を續けて行く如何なる方向に進むかは民族の方向舵の取り方如何に存する。我々の任は甚だ重いものがある然して亦今日に生きる若き世代の位置するところは更に思ひを深くすべきところにある。

多く思ひもかけぬ樣なことが戰時間後に勃發するのが現在の姿である。過去の單なる認識からは漸々と變轉する現實の事態を處理することが困難となりつゝある。混沌として、暗黒の中にとじこめられた樣に自己の位置するところの認識を失つてしまふ。恰も晴天飛行のみになれたものが、雲霧の中に盲目飛行をなす如く、そのなす術を失つて平衡を破壞するの運命に陷するのは實に恐るべきことゝ云はなければならない。

聖戰遂行の途次にある我々の一人一人が、かゝる状態に陷することから努力さけねばならぬことは云ふまでもないことである。それには浮動する表面的な現象のみの認識に終始することなくより深い基底をなす部分への確實なる認識へと向はなければならないのである。食糧問題が論ぜられ、低物價政策が叫ばれ、生活問題が云々せられ、藝術の貧困が論ぜられ、思想の低迷が問題とせられてゐる。かうした問題の發生の原因、その處理の沿ふべき線の追究と云ふことは、歴史の本流の核心の認識に依つてのみ可能なのである。職域奉公の實踐も、かゝる歴史の本流が何れの方向に如何なる流れ方をしつゝあるかの認識の上に立つてこそ始めて確乎たるものとなるのである。

今日の戰爭が國家總力の戰であることは改めて云ふまでもないことである。若き生命の持主として、國家の中堅層をなす靑年として我々學徒の任は甚だ大なるものが存する。特に選ばれて最高の學府に學ぶの機會をもつ我々は、現實の深い認識にその最高の努力を拂ふべきである。かゝる認識の上に新しき時代の構想を建設して行かねばならぬ。新しき酒は新しき革袋に入れねばならない。一度育くまれたものを新しいものへ轉換せしめることは非常の努力が要る。激しい情熱の所在がなけらねばならぬ。若き純潔とした心に充てる強き情熱の所有者たる我々學徒が、かゝる轉換の任を肩に負はずして何人が良くなし得るであらうか。

然し單なる口先のみの飛躍は空轉する車輪にも似てすこしも前進せしめ得ない。空轉は[illegible]天に通ずる。現代の要求するものはからさわぎではなくしてしつかりした基底の上に建てられた實踐力である。往々頭腦と肉體とが分離して考へられる。然し兩者は一個の主體として分離して考へられ得るものではない。勉學と云ふことは主體的な行爲として始めて可能である。現實の深い認識はかゝる勉學を經て可能である。今日の學徒はあまりに自己を可愛がりすぎると云はれてゐる。それが諷刺的な意味ではなくして、眞實なる正面からの言葉として云はれる時の急速に實現することを我々は期待したい。それには激しい意欲に燃えた、若き情熱の靑年たらねばならぬ。

在學年限短縮
二學期制を實施
＝學則五部を變更＝

昨臘八日大詔を奉戴し、敵なる米英に向けその火蓋を切つた大東亞戰は緒戰以來、ハワイに、フイリッピンに、マレーに、ビルマに皇軍の向ふ所旬日を出でずして赫々たる戰果を擧げ、全世界の耳目を聳動せしめた、然るに大東亞戰爭の規模は特に有史以來の擴大を告げ、我が荒鷲の翼下に慴伏する敵我が戰線の版圖する實に地球表面の四分の一にたんなんとしてゐる大東亞民族の浮沈を賭けたるこの聖戰を勝ち拔かんが爲には擧げて全國力をこれに集中せねばならぬ、かゝる國家目的に順ふべく我等學生も又一日も早く戰線に馳せ參ずるは帝國臣民の光榮ある義務である、他面長期に亙る戰爭遂行即建設を完遂せんが爲には銃後にだける生產も又これに呼應して飛躍的增强を計らねばならぬ

備て國防要員充足、勞務動員の一環として大學高專學生々徒の昨年在學年限短縮を繰上げ發表以來新らしい學則を作成せんと鋭意努力してゐた學校當局にかては昭和十七年度以後に對して左の如く臨時措置を決定本日發表を見たがこれは學年暦に主なる臨時變更が加へられ一ケ年が二學期とか學年の始終期とか大きな變更があつた

即ち本學々則中左記の條綱を左の通り臨時變更し當分の間此れを施行する（ ）內は變更前のもの

第一章　總則

◇第五條　學年は十月一日に始まり翌年九月三十日に終る、但し昭和十七年度は三月一日始まり九月三十日に終る（學年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る）

◇第六條　學年を分けて左の二學期にす（三學期制）

第一學期　自十月一日—至二月末日（自四月一日—至八月三十一日）

第二學期　自三月一日—至九月三十日（九月一日—至十二月三十一日）

卒業在學年限短縮が決定したるは時機に即したる處置と云へよう、學校當局としてもすでに、昨臘廿六日十六年度卒業生を送り出したが、その後の學則方針の臨時變更が加へられ急ぎ學生臨時の統一强化の一方面として決定せられた、學校當局としては先きの二勅令が發表されるや、その影響する所甚大なるに鑑み、かねてより鋭意その對策を考究中であつたが、その在學年限の結果、學生の質的低下をせしめざる樣種々之が對策を練り、大體一ケ月を繰上げて次年度授業を開始する事や又、祭日の休日を極度に短縮する事により、それにより各授業時間の不足を補ひ、學生の勉學及び體位向上にも十分時間を與へる等考究された。大東亞戰爭の戰果輝く時將來の中堅層たる之等學生の知智及び體位的水準を保つのみならず、かへつてその向上を計らねばならぬ

◇第七條　本大學休業日は左の如し

一、日曜日　祝祭日

一、本大學創立紀念日五月五日

一、春季休業　自二月二十日—至二月末日（自四月一日—至四月十五日）

一、夏季休業　自七月十六日—至八月十五日（自七月十六日—至九月十日）

一、冬季休業　自十二月二十五日—至一月七日（同じ）

◇第九條「各學部に三學年以上在學して卒業したる者云々」とあるを「各學部に二年六ヶ月以上在學して卒業したる者云々」と改む

第二章　學部

第一節　學科課程

◇第十條　各學部の修業期間を三學年とす　但し當分の間六ヶ月短縮し繰上げ卒業とす

◇第十五條　必修科目は選擇科目をもつて此等に代ふる事をあるべし

第三節　試驗

◇第二十九條　毎年六月に追試驗及再試驗を施行す

右の變更要項を一覽して明らかなる如く本年度は三月と十月と一年に二回の試驗が矢次ぎ早に行はれる事になる尚之に依り學部及び豫科の授業科目に多少の變更をみるに至るべく、これが具體的なことに就いては、また協議中にして新學年までには發表をみるであらう學則變更に伴ひ學科目の改變を餘儀なくせられる事は首肯できるが若し學科目の改變が實現發表を見た場合選擇科目の選び方に前より一層の努力と注意が必要となるは勿論であるし同時間に二つもの授業が重る事もあり止むを得ず履修出來ない科目も生ずるわけである

來る新學期はその期間に非常なる短縮を豫定され、三月より九月迄の六ケ月間に一ケ年分の學科目履修を理想的としてゐるが前記の如き意味からして止むを得ず履修し得なかつた科目は學生自身、圖書館及參考書等を利用し擔任教師の注意を聞き、その不足科目の補充を計らねばならない

試錬

嚴寒たる大雪原より聳ゆる白皙の連峰　果てし無き自然の猛威を斥け燦々たる陽光を浴び白銀の衣深く身に纏ひ嚴しき威容を誇るその雄姿　突兀と雲際高く聳ゆる銀嶺峨々たる岩の稜線も總ての大自然の威力に抗して凝然として聳え立つ　その孤高さ　何たる崇高さ、何たる嚴しさよ

今白雪に覆はれたる嶮を越して敢然と大自然に戰ひを挑む影二つ、一步又一步確保するその地盤　難苦に耐へ忍ぶ彼等の前途に偉大なる光明あり

【劍岳—山岳部】

本年度豫科入試
三月九日より執行

本年度本學豫科入學試驗は左記により三月九日より執行される

募集人員　文科　商科　約二百四十名

◇志願期日　二月二日より二月二十五日まで

◇試驗期日

學科　三月九日

口頭試問及身體檢査　三月十三日及三月十四日

◇入學許可發表　三月十七日

本年度入試における特徵は昨年度と同樣國語及英語に數學の試驗を行つて文科系における理科的要素を强調した點であり、綜合的知識及實行の切望せらるる現時勢にたて數學を試驗科目に入れる事は非常に意義ある事と思はれる。亦試驗期日が例年に比べて著しく早くなつて居る點が注目を引くが、昨年の在學年限短縮による學生の質の低下を補はうとする、學校當局の意向のあらはれの一部と考へる事が出來る

徵兵延期期間短縮の實行により中學校卒業生が所謂浪人する事は事實上不可能になつた事、及び時局が要求する無駄の無い學生生活に目覺めて各學校共入學志願者の激增を見る事と思ふが本學豫科に於ても最近數年の入學志願者數の增加率と思ひ合はせて相當激烈な競爭が行はれる事と想像される

以上述べた今年度豫科入學試驗にかける例年と異れる特異性は學校當局の亦時局の學生に對する要望が、一つのまとまつた形の一端として現はれたものと思はれるがそれと同時に入學志願者自身に對しての期待が大きくなつた事を物語つて居ると思ふ

今後の學生は現在の學生と同樣否それ以上に國家的要望が加はると同時に責任は大であり、其の大いなる前途は以て意を强ふするに足るのであるが、かかる要望、責任、前途を甘受するものは優秀にして意志の强固なものでなくてはならず、國家が全世界がかかる學生、かかる人間を要求して居る

かかる重大時期に於て重大意義を持つ學生たらんとする志願者中に多數の否全部が之等の條件を具備するに足る大東亞戰爭下の學徒である事を切望する

學徒實踐要項決定
建設の氣魄と資質を錬成

決戰下一億國民擧つて島國の世界史的使命達成に邁進する秋、我等學生たる者は愈々その責務の重大なることを念ひ蹶起努勵し克く其の本分に徹して以て聖旨に應へ奉り「今次征戰の雄渾なる意義を自覺して大東亞建設の氣魄と資質とを錬成すること」を目標として學風の振興と生活の刷新を圖り以下現下軍國の要請に應へねばならぬ、茲にかて文部省は舊臘全國大學高等專門學校學生々徒の生活指導に關し種々協議し、既に各校は各々にかて實施しつゝある事項に更に一段の工夫と努力を以て其の指導に遺憾なきを期すべくこの程左の如き實踐要項を各學校長宛通牒するところがあつた

戰時學徒實踐要項

一、學業の研鑽に精勵し以て國恩に報ずるは學徒の本分なり寸時と雖も勉學のこと廢すべからず否寧ろ研學自修克く學徒教養の水準を高め以て大東亞文化の建設に邁進せざるべからず特に戰時下に於ては各自專門の分野に於て研鑽とれ勉め將來の基礎を確立すべく如何なる方面を專攻すとも常に心を國家の上に致しその負荷の大任を全うすべし

例へば一時興奮に驅られ徒に呼號叱咤してその本分を逸脫するが如き或は社稷の興亡をも顧みず所謂學の爲めの學に終始して得々たるが如きは斷じて學徒たる者の取るべき態度にあらず

二、從來の學生生活には此際斷乎一新すべきもの少からず情操陶冶等に名を藉り徒りに柔弱虛飾に走るが如きは嚴に之を戒め大東亞建設の前途甚だ遠く任重きを思ひ常に質實剛健を旨とし困苦缺乏に堪へ節義を重んじ氣魄を向ふは殊に意を用ふべき所なり

例へば學徒たる者は凡て生活を簡素にし服飾を廢し飲食の費を戒め知愛相率ゐ中と雖も標容平袴等の如きは之を用ひず進みては外套を去り耐寒訓練に當るの氣概あるべし

三、學徒の態度は須く端正にして堂々たるを要す軍事教練の成果も之を日常生活の中に具現し規律整然たる動作を以て事を處理し又師長に對する禮儀は必ず之を嚴守すべし

例へば從來緩慢にして節度なき風を以て却つて餘裕ある態度となしたるが如き幣を打破し時間を勵行し服裝を端正にし交通道德を嚴守しまた師弟の禮は嚴として守り更に愛國の念に燃ゆるを要す殊に戰時下の教練に於ては將來皇軍の幹部としての重責を深く省み軍事能力の養成に努むべし

四、古今未曾有の大戰の下にありて尙學業に勵み得る國恩を仰ぎ父母の慈愛を思ひ學徒たる者は殊に節約を旨とし物資を愛護し又生產に從事する人々に對しても衷心感謝の意を表すると共に自らも進みて生產の事に當り奉公の念に徹すべし

例へば戰時下學徒たるものは深く皇軍の後勤たるの自覺に徹し一般青年が或ひは農耕に從ひ或ひは工場に働き直接戰時下國家の緊要なる生產に從事せるを顧念し身を持するに感謝と尊敬とを以てし老幼婦女を勞はり特に車中にては之に座席を讓り又學校報國隊の諸活動その他所謂勤勞作業等に際しては最も眞面目に且つ積極的に之に從ふべく

かくて日本全國の青年は克く一體となりて邦家の負荷に應ふることを得べし

五、學徒の體位向上は大東亞建設の根基たり學徒たる者宜しく思ひを此に致し自ら進んで積極的なる身心の鍛錬に力を用ひ逞しき體力と明朗闊達なる精神とを涵養し卒業後直ちに如何なる業務に服するも完全にその責務を果すの用意なかるべからず

例へば體力章檢定の標準の向上を期して努力練習し國防競技等を盛にし單なる娯樂的競技に墮することなく精神的要素を重視し早起早寢を勵行し煙草を排除し身邊を淸潔にし規律ある生活をし日常衞生を重んじ殊に結核等の傳染性疾患に冒されたる際は敎養ある學徒として苟くも他に累を及ぼすが如きことなきやう注意すべし

戰時下に變貌する學生々活
―生活調査累計成る―

經濟學會が昨年十月から十一月上旬に亙つて實施した學生生活調査は、當會委員の手によつて集計されて來たが、今度一應の完成を見るに至つた、本調査に當つて學生諸君が眞摯なる態度を示し、正確に赤裸々の自己の日常生活の在り方を申告したことは、關係者一同をいたく喜ばせてゐる、その協力に對し此處に厚く謝意を述べる次第である、次に此の集計の結果の一部を概觀してみよう

申告者　數は豫科においては前回と殆ど同じ比率を示してゐるが、學部では前回の五四・六パーセントから一躍して八四パーセントに增加を見、特に當時最高學年であつた去る十二月の卒業生が全學年中最高比率を獲得した。これは卒業生諸君が卒業繰上げのあわたゞしい緊迫裡にも拘らず、本調査への積極的協力をなしたことを證明するもので、眞に感謝である

前回から三年を經た今回の調査は、前回當時より遙るかに濃厚となつた戰時色に反映された學生の物心兩方面の生活が如何に推移したかといふ點に重點が置かれて集計された。物質的生活を見ると、時代、企業の騰貴に伴ふ生活費の增大が激しい。即ち住居別から云へば一月平均に自宅は四十圓、親戚又は知人は六十圓から七十圓、下宿、アパート、間借は九十圓——百圓、私設寮、合宿は六十圓を必要としてゐる。これを前回に比すれば殆んど倍額に上るものである。大多數が裕福な環境にある本學學生が、如何なる程度に消費規正を行つてゐるであらうか。

國家が今年の强靱な體格を要求してゐる今日、本學學生は大半それに應じ得るやうである。虛弱者は全數の五パーセントを占めるに過ぎない。このことは本學においては鍛錬本部に所屬する者が全學の三分の一以上に達してゐることも有力な原因してゐるものと見られる、鍛錬本部に次いでは厚生、文化、國防本部の順位で學生を包含してゐる。

知的水準　の量的指標たる讀書時間については前回と殆ど變化なく、二時間から三時間といふところが過半數である。質的變化を「愛讀書」によつて察知すれば、無効票數の激減が何よりも向上を物語るものと云へよう。文藝、經濟の順位に相違はないが、注目すべきは前回に於いて五位の哲學と七位の歷史が、それぞれ三、四位に擡頭し、逆に三位にあつた宗教が六位に轉落したことである。

最も愛　好する著名の日本の部では、漱石の首位は依然動かないが、著しい變化は武者小路實篤の躍進と菊池寬の名が殆ど見えなくなつたことである。外國の部ではヘッセが素晴らしい進出振りで次位を占めた他、大きな變化はなく、相變らず古典は愛讀されてゐる。「最近讀みて感銘を受けたる書」では「ノロ高地」「マイン・カンプ」「フランス敗れたり」等の時局物が上位を獨占してゐる。たゞ「出家とその弟子」「愛と認識の出發」は豫科に比して學部が遙に少くなつてゐる點、注目に値する。概して云へば、豫科生の思索への憧れとして哲學が讀まれて來たことは豫科の向上を物語るものであり、ひいては全學の知的水準上昇の基礎となるものであらう。このことは、今回新に西田幾多郎、三木淸、プラトンの名が現れて來たことによつても窺ひ知られる。「講讀雜誌名」は四位まで中央公論、改造、文藝春秋、日本評論の順で全部綜合雜誌である。

前回と同樣に、西洋音樂、ヒットラー、獨逸への憧憬と好意は大きい。面白いのは前回四位だつたフランスがイタリーを遙かに凌駕して、二位を占めてゐることである。時局の反映によつてか、今回は娛樂機關の利用者が著るしい減退を示してゐる。特に利用する娛樂機關を有たぬ者が前回の五・七パーセントから八一・一パーセントと驚くべき數に躍つてゐる。今回新たに設けられた「今夏利用方法」は讀書に置いたが最も高く、勤勞作業へ從事したそれも第四位に位し、學生の勤勞奉公への自主的意欲を表明してゐる。

無効票　數は前回よりは減少したが、まだ決して十分とは云へぬものである。前回に比してより忠實な記入を行つたことは、次回への好成績を豫期し得るものである。この調査が本學の明日への途の[illegible]指標となり、本學々生の勉學、修養、體位向上の指針たり得ること[illegible]れない。たほ經濟學會は本調査の報告を今春パンフレットにして廣く世に發表する豫定である（經濟學會）

臨時徵兵檢査要項決定
四月十一日より實施

昭和十七年度卒業生に關する臨時徵兵檢査實施細目が、去る十五日陸軍省令により公布され、來る四月十一日から同三十日までの間、卒業前に於て施行される事に決定した

昨年十月十六日公布された修業年限及び在學徵集延期々間短縮に關する二勅令發動により、本年三月に卒業すべき卒業生が、すでに昨年十二月にそれぞれ卒業、臨時徵兵檢査を經て、或ひは實社會に、或ひは第一線に活躍され、右二勅令の意圖を遺憾なく發揮してゐる

本十七年度は右勅令を最大限に適用され、更に三ケ月間短縮、九月に卒業することになつたが、それに伴ひ去る十五日具體的な臨時徵兵檢査施行に關する細目が陸軍省令として官報を以つて公布された

なほその主なる點は次の通り

◇今回臨時徵兵檢査受檢該當者は

一、今年九月卒業豫定者一、在學徵集延期々間滿了者一、昨年受檢該當者にして病氣その他により受檢せざりし者一、昨年受檢しになつた者一、昨年受檢して入營の際に病氣で即日歸鄕となつた者

◇在學徵集延期々間滿了届、在留地徵兵檢査受檢願、寄留地受檢願は二月二十日まで、在學徵集延期々間延長願は三月二十日までに本籍地市町村長（東京、京都、大阪、名古屋、横濱、神戸市にありては區長）に提出すること

◇臨時徵兵署を開設して四月十一日より同三十日までに檢査を實施する

◇本年徵兵檢査を受くべき專門學校高等師範在學者で大學に入學すべきものは、昭和十六年陸軍省令第四十四號第四條に規定された在學徵集延期々間延長届を三月二十日までに本籍地の市町村長に提出すること

アメリカ研究所
積極活動へ

戰時國家としてのアメリカの實體及び交戰能力を理論的に實踐的に論證すべく敢然として立ち上つた立教大學アメリカ研究所では、所內の諸設備に總ゆる完成の努力を拂ひつゝあつたが、愈々完了、今後は各部へ積極的に働きかくべく第二段階に着手、連日協議を重ねて具體案を練つてゐるが、大體決定をみたもの、如く、近々その具體化に乘り出す筈である

尙同アメリカ研究所圖書閲覽も其の後閲覽者の增大をみせてゐるが更により以上の利用を一般校友諸父兄に切望してゐる

女子選科入學許可　文學部

昭和十七年度の新學期を間近に控へた文學部では實社會の期待に副ふべくその努力の第一步として新學期より女子の選科入學聽講を許可する事に決定した

文學部では以前女子の聽講を許可し數人の聽講を見たが此等の人は第二世で母國の語學を學ばんとして本學に來たのであつた

その後今學期まで中絕して居たが文學部では新たな學則の下に新學期より試驗選考の上聽講を許可する方針に決定を見た、即ち

來る三月文學部英文科、史學科哲學科、宗教學科の各科第一年に限り試驗の上若干名選科生として聽講を許し、又試驗科目は昨年度迄は各科共通であつたのが今學期より各科別に異る科目を行ふ事になつたが英文學科としては英譯、國史、哲學科及宗教科では英譯と哲學概論で口頭試問は勿論共通に行はれる

又選科入學願書受付開始が二月十六日より受付ける尚志望者の如何は不明であるが最近女子の學術的分野にたける進出が目覺ましい折から注目すべきものがあらう

選科生は本科生と異り志望授業の時間內のみ聽講を許され他の志望せざる學科目の聽講は許可されない事になつて居る、斯樣な時に豫め教務課の許可を受けてから聽講せねばならない

雜誌「太陽」全卷寄贈
西村駒次氏の快擧

今回立教大學圖書館へ明治大正兩時代にかけて我國の文化を指導した最初の綜合雜誌「太陽」のその創刊號より終刊に至るまでを[illegible]へて寄贈されることになつた

寄贈者は經濟學部經濟科本年度卒業の西村駒次氏である氏は在學中より山下教授のゼミナールに參加嚴格な研究を續けて來られたのであるが、此の關係より明治文化の貴重な研究資料である雜誌「太陽」が幸ひにも同家に保存されてゐるのでこれを同教授の手を通して圖書館へ寄贈すべく手續を採られたもである、之に依つて本學圖書館は益々その精彩を加へることゝなつた

雜誌「太陽」は、明治二十八年一月に創刊號を世に送り爾來昭和三年二月に廢刊を見るまでその間實に三十有餘年、數百册に亘る膨大なもので、時價にして數百圓はするであらうと云はれてゐる、同誌は博文館より發行せられしもので、眞赤な日の出に眞黑な島の圖の表紙は今に吾吾によつて明治文化を表徵する懷しい思ひ出である

此の雜誌は正に明治大正にわたる文化の寶庫であり、日本文化史の研究上缺くべからざる資料として貴重なるものである

本雜誌は恐らく東京帝大の明治文化研究所の宮武外骨氏の藏以外にはその全卷が揃へられてゐるところはあるまいと云はれてゐる、それが此の度西村君の厚意により本學に寄せられることとなつたのは誠に喜ぶべきことである

一般に閑却し易い雜誌がその創刊號より終刊號に至るまで數十年に亘るものが、一冊の缺本もなく保存せられてゐたと云ふ事は誠に稀有の仕合せで、それをそつくりそのまゝ本學へ寄贈された西村氏の美擧は學園にとつて近來の快事と云ふべきである

豫科精勤賞設定

豫科學生課にかては本年度より新しく豫科精勤賞を設け豫科生の勤勞を賞する事と成つた

豫科生の出席はかねてから重要視され學業との比率は相當高價に表價されてゐたが特に精勤賞と云つた樣なものもなく唯畢點を上げるに過ぎなかつたので之が社會上の視野からして此の種の褒賞も必要と認められ此處に新しく精勤賞の設定をみるに至つたものである

其の精勤賞の範圍は缺勤者は勿論の事であるが十時間以內の缺席にも精勤賞を認められる事と成つてゐる

本學恤兵金

ハワイ大奇襲作戰に始まつた大東亞戰に無敵帝國陸海軍は東西南北、炎熱寒冷の地に轉戰し、目醒ましき大戰果を擧げて世界を驚嘆させてゐるが、銃後に於ても赤誠溢るる獻金部隊の數は、夥しいのである事は毎日のラジオ放送の通りである本學も亦獻金する處があつた

これ等金額は昨秋來の軍需工場勤勞奉仕による手當金一千四百五十四圓七十五錢、學生の獻金六百六十六圓七十五錢、學校より三百圓、教職員の七十八圓七十五錢計二千五百圓であつた。

塔の話題

國民的試練

◇…吾々が生活して行く上に無意識に求めやうとする慾望がある。それは昔から凡ゆるもの、基底とされた衣食住である。衣食住ほど人の心を左右してゐるものはあるまい何故なら人は常に現在の環境に滿足する性質に乏しいからである。眞實なる毎日を迎へた精神のすばらしく偉大なる人々の事である。

◇…吾々はよく貧乏がもたらした生活苦から偉大なる人間を作り上げた成功者を澤山知つてゐる。三度の飯は二度たし、衣服はボロ／＼のものを纏ひ、凡ゆる困苦缺乏に耐へ拔かれながらよくこれに堪へ、

◇…二月一日から日本國民の一人々々は年一〇〇點乃至八〇點に衣類の制限を受けることゝなつた、これは吾々へのない限り直々ならぬ生活である。例へば靴下は年六足と云ふことになつてゐるが、ス・フの靴下ではどんなに大切にして先づ四日で穴があく、使用によつては一日で穴のあく運命を持つてゐる、だから一足一週間も持たせるのには何回も穴を塞がねばならないどうみても一年間六足と云ふ計算は出て來ないのである。

◇…昭和十六年十二月八日吾々は宣戰の大詔を拜して無限なる國民的感激が如何に偉大であるかを新にしたのである。吾々はどうしても戰爭には勝たねばならぬ。

◇…簡易な生活程自分を活躍させるものはない。今國民の一人一人が貧乏から生れた不斷の精神を知つた生活者の如く新なる試練を求めて偉大なる人間を作らねばならない秋である。さうする事に依つて吾々はより高いより強い國家を得ると共によりすばらしい國民性をも得る事が出來るそれが同時により高度の衣食住をかち得る事でもある。

◇…吾々が今與へられたる偉大なる試練を如何に切り拔けて行くか。吾々はかつての先覺者の如く個々で行ふのではない、國民全體が同時に行ふのであるから精神的に容易のはずである、注意しなければならないのは此の精神の容易から來る僻であらねばならぬ

鐘

試練！國民的大試練！苦しき試練を經てこそ光ある完成の道は拓かれる。

×

勝利への道、戰後の建設、吾等は倦まざる努力を以て戰ち拔かん。

×

理性、批判、情熱、青年は將來に生きる、努力せよ、忍耐せよ。

×　×

光明ある前の大道、飽く迄戰せよ、鐘木は一切大局に併在せよ、而して一億擧りて光輝ある勝捷へ邁進せん。

岩波書店新刊

シロコゴルフ　北方ツングースの社會構成　川久保悌郎　田中克己　譯　A5判八〇〇頁　價六・五〇

[illegible]

漱石　寅彦　三重吉　東北帝大教授　小宮豐隆　B6判三七〇頁　價二・五〇

[illegible]

有斐閣新刊　東京神田神保町　振替東京三七〇番

金本位制度批判論　新京法政大學教授　中西仁三著　A5判　價三・五〇　〒一四

[illegible]

貨幣論集（經濟學名著飜譯叢書10）　フリードリッヒ・ヴィーザー著　京城高商教授　安田充譯　A5判　價三・四〇　〒一四

[illegible]

航空母艦　海軍中將　永村清著　科學新書新刊　價一・五〇　〒・一〇

[illegible]

志賀直哉集　三代名作全集　第九回配本　B6判　價二・五〇　〒一〇　內容見本進呈

現文壇の最高峰たる志賀直哉氏の作品は、何れも萬人崇敬の逸品であるが、[illegible]

河出書房　東京・日本橋・通三　振替東京一〇八〇一

最新刊

タイ國史　W・A・R・ウッド著　郡司喜一譯　B6判三七〇頁　價二・二〇（〒・一〇）

[illegible]

儒教倫理概論　文博　服部宇之吉著　價四・五〇　〒・二一

第三戰線（宣傳戰の基調）　價一・八〇　〒・一〇

安南通史　附（佛印全圖）　岩村成允著　價七・〇〇　〒・三三

現代日本史　大森金五郎著　價三・八〇　〒・三三

冨山房　東京市神田區神保町一ノ三　振替東京一〇二〇一番

生命と科學　醫學博士　杉靖三郎著　B6判上製　價二・五〇　〒一四

ドイツ精神の生成　B6美裝　價二・二〇　〒一四

スパルタ　仁戶田六三郎著　B6美裝　價二・〇〇　〒一〇

[illegible]

目黑書店　東京神田駿河臺三ノ一

明治文化叢書

學問のすゝめ　福澤諭吉著　富田正文解題

社會經濟論　佐田介石著　本庄榮治郎解題　B6判上製三〇二頁　價一・五〇　〒一四

南國記　竹越三叉著　木村莊五解題　B6判上製四一六頁　價二・〇〇　〒一四

[illegible]

日本評論社

説苑

猶太人の問題

今日彼等が第二の祖國愛はシオンの實現とさへ稱する米國を研究するの必要と、彼等が彼國に於て占めてゐる地位の重要性とを認識するとき猶太民族の政治經濟的並に宗教的發展の歷史的考察をなすべき事は益々緊要なこと〻思はざるを得ない。

縣　康

契約の地カナンに還つて安國樂郷ダビデ王朝の繁榮を讃ひしめ給花一朝の夢となつて、豫言の完成は未だ望むべからず、夜ごと日ごと歎きの壁にすがつて、エホバに祈禱をさゝげる猶太人の數は世にも憐れと言ふべきである。其の羅馬に亡ぼされ、世界浪々の民となつて一千九百年今や天涯國土を有たず、他の民族の中に寄生し天與の材質は、他の民族に勝れたりと云ふも劣る所なく、寄生したる本國の中樞に住し、果ては其の私利私慾に溺り、暴虐非道を犯さんとする、こゝに猶太人問題が發生して來たのである。近世歐洲諸國家中殊も猶太人問題の爲めに困しみしは帝政ロシヤであり、最近にあつてはドイツである。ロシヤの猶太人は主としてウクライナと其の附近及びポーランドを中心として盤踞し、十九世紀の中葉以來、其の經濟的實權を把り、その爲め農民の生活を脅かすに至つた。こゝに於て、アレクサンドル二世治下の排猶運動起り、各地にポグロムの發生となり、從て猶太人は漸々西に逃れ、其多數は遠く大西洋を越つて、北米合衆國に安住の地を求めたのである。獨逸にては親猶政策と排猶政策とが交々行はれたのであるが、ヒットラー氏の政權を握るや、徹底的猶太人排斥となり、彼等は其地位を逐はれ、財産を押收され、獨逸國に其占據區域にある猶太人が或は海外に逃れ或はゲットウの住民となつては住居つた事は、人の普く知る處である。

●猶太人は何故に斯く排斥さるゝか。世界に猶太人問題の起れるは如何なる理由によるや、これこそ我々が究明すべき問題である。一言にして、最を讀はゞ、猶太人問題は、民族問題である。獨逸が今日戰つてゐる根本理由は、ゲルマン民族に對立する猶太民族を消滅さんが爲である。ウイーンの修業時代を通して、若きヒットラーの眼に映じ、深刻に燒き付けられた一事は、猶太人の惡らしさであつた。彼の新興オーストリヤが、議會政治の濫ひの下自由主義、民主々義の美名の中で如何に少數猶太人の爲に、翻弄されて居たかに就て『我が闘爭』の中で彼は謂ふ、「私には其首都の示してゐた人種混合が忌々しいものであつた。チエコ人ポーランド人、ハンガリー人、ルテニア人、セルビヤ人、クロアート人等諸民族の混淆が忌々しかつた而も其到る所、人類永久の分解菌たる猶太人の跋行してゐた事が更に忌々しかつた」而して亦「もし猶太人が、マルクス主義の信條の助をかりて、此世界の諸民族を征服するに至つたならば、其時には彼の冠は人類の死の花環となるであらう」と。

凡そ一民族が一國家を形成するに比べて、數個の民族が一國家内に雜居する時には、政治上、幾多の問題の起り來るべきことは自ら瞭な所である。まして團結に缺くゲルマン民族が一つの個性を堅持する猶太民族と同一國家内に安住し得ないで有らう事も亦自ら明であらう。猶太人は「選民思想」を持つた民族である、そして彼等は文化面に於て、驅る優勢の地位に經濟的に從て政治的及其他各種の在る。玆に猶太問題が伏在する。

猶太

人同志の中にも互に親愛し合ふ場合も有らうけれ共彼等がモーセの律法を通して、神より享けたる選民の思想は、他の如何なる民族が過去に於て示したるよりも、以上に確固たる事は、猶太三千年の歷史が明示する所である。彼等が、如何にして經濟的に發展したかの問題は未だ明にされては居ない。Wゾムバルトが其著書「猶太人と其經濟生活」の中で、猶太人が資本主義の發生者となつた經過を說き其根本理由を猶太教の教理にありと說いたのは、後に、相當有力な反駁を受けた。然し乍ら、中世基督教が利子を禁じ、營利を排斥したるに比し、或は佛教が營利經濟の原理第一、販賣貿易を戒め財寶蓄積を說き回教亦ウズラを禁じたるが如きに比べる時、猶太教の律で來るトーラが他民族に對して營利を認めたるが如きは、大に異つた點で有り、其原因の如何は措き事實ゾムバルトの說く樣に猶太人の行く所其都市なり部落なりが經濟的繁盛を示し、之を去らしめたる所忽ち衰へたりと言ふのは、各所に見られる所の歷史的事實であつた。一例を擧げれば從來比較的等閑に附されてゐた回教諸國の經濟史を按ずる時、第九世紀より十世紀にかけて、カリフ治下のバグダードが或はエジプトが、猶太人商人の活躍によつて盛んとなり猶太人に關係は不可能たりと謂はれる位置に彼の高い彼等がエジプトに於て經濟の指導者で有つた事實もある。近世と全く相似たる銀行家がバグダードに行はれ、手形、信用状の流通さへも彼等猶太人によつて、實に千年前に實行されたることは注意すべき事柄であらう。而してカリフの保護の下で行はれたるは更に降て十二世紀の英王室に對し、猶太人が同様の[illegible]財政を擔し、彼等には王室諸侯の[illegible]となりその[illegible]を招來したると聯る相似たる狀態であつたのである。

中世から近世にかけて商人として或は金融業者として、猶太人が各地に發展を遂げ今日の經濟的基礎を築き上げたる事實は炳として動かすべからざる所である。

經濟

彼等が此の如く發展し得たる理由として、殊も注意すべき點は彼等の團結せる民族なる事である。史家の民者は夙に之を認めて來た。彼等の「團結する性質」こそ其發展の根本的要素であると。彼等は[illegible]的、宗教的に團結して來た。猶太史上、ガオニック時代と呼ばれる六世紀から十一世紀に至る時代に在つてバビロニヤの猶太人は全世界のデイアスポラ殊にペルシヤ、パレスタイン、エヂプト、アフリカ、スペイン等のデイアスポラ猶太人に對し、精神的に團結を繫つた。殊にバビロニヤのアカデミイが其中心となり、此等のアカデミイに對し、各地の猶太人が、宗教的、法律的なる問題は勿論、宗教によつて日常を律する彼等は、事々に、玆を中心として、其指令下に從て生活したのである。從つて、遠く海外からも、此アカデミイを維持する爲めの獻金は寄せられ、斯くして中世猶太人の中央集權は、嚴然たる形を以て、ガオンによつて行はれたので有る。而して斯かる主として宗教的な根據に因る團結があつたればこそ、彼等は分散しつゝも、而かゝる政治經濟的發展を遂げ得たのである。

太古

にて於てモーゼ及びその律法により、中世にあつてはガオンによつて統一降つてはタルムウドにより嚴しくされ來つた猶太人が今日に於ては何によつて統一されつゝあるか。猶太人論者は謂ふ。「フリーメー[illegible]

選民

[illegible]ソンリーによる」と。果して然るか、是研究の一題目たり。

と自ら信ずる猶太人は[illegible]して世界をその膝下に跪坐せしめしつゝありと言ふは猶太人の[illegible]を除けば即ち諸へる所である。[illegible]に對し[illegible]となるは所謂「シオン長老の議定書」なるものである。而してこのプロトコールを詳細に吟味し猶太人自らの所謂に顧みる時はフランス革命もロシア革命も日露戰爭も第一次世界大戰も、更に今次の大戰も、一として猶太の陰謀によらざるはない。

サラリーマン論

住田正一

一

現在多くの會社は大概は株式組織である。然し之を歷史的に觀ると、何れも個人商店、個人經營から發達したものである。

我國の歷史を見ても、明治初年以來六七十年、個人企業から會社組織に進んだもので、然も現在は其の全盛時代とも云ふべき狀態である。或る人が資本主義經濟は即ち株式經濟と稱したのもかかる事である。

[illegible]

マーシャルとケインズ

日本新古典學派理論の缺陥點を指摘しそして彼自身の理念を以てその缺陥を補充することによつて全く新しい彼自身の理論を樹立したケインズこそ實に天才的な新古典學派理論の補完者である。

高　承　濟

最近經濟學界の最大の注目をひいてゐる書物「雇傭、利子及貨幣の一般理論」の初の部分において著者ケインズは「かゝる（一般理論と云ふ）表題をつけた目的は、私の諸議論及び結論を、そこに私自身有[illegible]、また過去百年間において實際的にも理論的にも經濟思想を支配して來た古典學派理論に對比するにある」と言つてゐる。こゝで、注意すべきことは、ケインズ自身、註において言つてゐる如く、古典學派とは、所謂新古典學派をも含めての意味であると云ふことである。

然に、一般理論の著者としてのケインズにとつて、古典學派理論とは、彼の「偉大なる師」マーシャルの理論のことである。かゝる言ひ方が、少しでも間違ひでないことは彼の一般理論の讀者は何人も承認するところであらう。

そこでこの小論の目標もケインズの最初の著作たる貨幣改革論、次の貨幣論、そして最近の一般理論を順に取り上げマーシャルとケインズとの相異[illegible]

[illegible]

……偉大なる弟子ケインズを喜んでゐる樣が幻想される（十月十一日）

學生論壇

自我・ロゴス・神

如何なる論理の上に築かれた勢力を以て人生と世界とに立ち向ふとしても最も重要であるのは[illegible]ロゴスへの接近に對する努力に於いてのみ日本人は救ひ得るであらう。

小　倉　忠

人間存在の根本的課題としての自我の完成は個と社會、國家との有機的關聯を合理的に解決することを意味するものである。換言すれば、自我の完成とは個の完成を意味するものでなく全體との關係を最も正當なる立場に於て把握することの可能性を意味するものでなければならない。

[illegible]

新刊紹介

「日本經濟史概說」

中村吉治著

日本經濟史の研究は先輩者の努力すべき業績のあとをうけて、大正末期から昭和年代にかけて著しい發展期を現出し、爾來、各種の理論の檢討や個々の部門の研究が相繼ぎ、量的にも質的にも大きな成果をあげて現在に至つてをり、更に現在の如き時代的要請の下においてはより以上の發展が期待される許りでなく、此の期待を裏切らない著書が發表されねばならぬと信ずる。本書は、正に此の期待に價する好著である。

內容は大體原始時代、律令時代次いで中世封建時代及近世封建時代を述べ、就中中世から近世の初期に於ける農政、農村の部面に力を注いでゐる。日本評論社發行、定價六圓

世界政治研究會編
世界政治研究
大東亜戰爭を戰ひ拔きつゝある現在、世界政治の動向を推察し、東亞共榮圏の確保鞏固は今後の重大問題である。今ここに杉森孝次郎博士を主宰者とせる世界政治研究會の會員が協力執筆せる勞作成る。必讀を乞ふ。
【執筆者】杉森孝次郎・川原篤・内田繁隆・松岡壽八・中村佐一・高橋實恒・天川信雄・吉村正・大西邦敏・前田鋼・巡山喜太郎・中本資雄
（定價三圓三十錢　〒二十二錢）

論理と現實・船山信一
文化の核心は論理であり、論理は現實から生れるといふのが本書を貫く精神である。古い論理が無力と化した現在、我々はこの動亂のさ中から新しい論理を創り出さねばならぬ。論理が自己を新たにして始めて文化は新しい一歩を歷史に刻みうるのだ。
（定價一圓六十錢　〒十四錢）

東京丸ビル　中央公論社
振替東京三四　[illegible]五八八

民族學研究所編
民族學年報　第三卷
規格A5判　價四・五〇
下野の獅子舞―（本邦農耕儀禮の一研究）………古野清人
所謂「まいりのほとけ」の信仰に就て―（舊仙臺領村落調査報告第二）………及川宏
同族組織と親方子方慣行………有賀喜左衛門
我が國現行の笠に就て（後編二）………宮本勢太郎
タイ人口の人文地理的一考察―滿洲人口密度及增加率を指標として………小川徹
山地高砂族の地理的知識と社會、政治組織………馬淵東一
蒙古語喀喇沁右旗千府方言における冠婚葬………野村正良
邦領樺太オロツコの氏族に就て（一）………石田英一郎
發行所　神田區神保町一　振替東京三二五五五　三省堂

史苑　第十四卷第二號
中世史學について（其一）………小沢秀雄
江戶時代に於ける對州藩の朝鮮貿易に就て………遠矢徹志
伊豆七島關係文書解題（一）………藤木喜久麿
史學研究法（四五）………ベルンハイム
定價金七十五錢

小林秀雄教授還曆記念　史學論叢　菊判六三〇頁　定價金五圓也
グレーブナー著・小林秀雄譯　民族學研究法　B6判三一三頁　定價一圓五〇錢
東京市豊島區池袋三丁目　立教大學史學研究室　振替東京七六六九（?）

全卷完結
土地なき民
これぞ世界新秩序建設戰の進軍譜！
今や東亞に歐洲に、相俱に世界新秩序建設を目指して、決死的猛進を續けつつある日獨兩民族の魂を結合せしめる文學として決戰下の吾等に無限の示唆と感銘を與へてやまぬ本書こそ全國民必讀の名著だ！
ハンス・グリム　星野愼一譯　各冊B6判四百數十頁　昭和本
第一卷　狹隘なる故鄕　增刷出來　一・八〇
第二卷　異鄕のさすらひ　增刷出來　一・八〇
第三卷　獨逸の領土　增刷出來　一・八〇
第四卷　土地なき民　增刷出來　一・八〇
【批評集・內容見本贈呈　三錢切手封入御申込み下さい】
全四卷　（送各一四）
東京市四谷區四谷本鹽町　振替口座東京一七四二九　鱒書房

ギリシア・ラテン古典の完譯
生活社刊行の言
ギリシア・ラテン文化は西歐思潮の源泉にして、人類に遺された哲學的、科學的、藝術的最大の遺産である。玆に弊社は斯界諸權威の御協力を得て、原典よりの嚴正なる完譯を贈り、邦家文教の資に供せんとす。
編輯委員　田中秀央　落合太郎　呉茂一　神田盾夫　田中美知太郎　青木巖
既刊　ヘロドトス歷史　上・下　青木巖譯　上卷A5判四四四頁　下卷A5判四八二頁　價各四圓八〇　〒四九
近刊　トゥーキューディデース　歷史　青木巖譯
作者不明　南海案內記　村川堅太郎譯
珠玉の如き希臘散文の粹、行文流麗、高雅雄渾なる原典の完譯
東京市神田區三崎町一（?）　振替東京四三三〇二（?）

學生時報

戰時下と學生

菅　圓　吉

皇軍の赫々たる戰果の報を耳にしつゝ新しき年を迎へた事は、何と云ふ感激の極みであらう。これ實に全く　大君の御稜威の然らしむる所である事は勿論であるが、それと共に又皇軍將士の勇戰奮鬪による事をも忘れてはならぬ。いづれにせよ我々は此の皇國に生を享けた光榮を今更の如く感ぜざるを得ないと同時に、我々は我々の責任の重きを痛感せざるを得ない。我々は我々の前に横たはる洋々たる前途を望んで、意氣天を衝くものがあるが、然し足下には突破すべき幾多の障礙物が未だ未だ殘つてゐるのを見る時、戰ひは之からだと云はねばならぬ。戰ひは未だ緒についたに過ぎない。之からが本論に入るのである。此の時に當つて學生は如何なる態度を以つて處すべきであらうか。

云ふ迄もなく國民皆兵の我が國に於ては、一朝事あれば國民全部が國防の第一線に立つて義勇公に奉じなければならぬ。而して今や其の時が眼の前に來たのだとも云へる。然し勇猛果敢の皇軍の武勳の故に、我々は戰時下にありつゝも尚ほ平時とそれ程にも變らぬ生活を續け、綽々として餘裕を示す事が出來るとは、何と云ふ有難い事であるだらう。

然し何と云つても今は戰時である。而して戰時下に於ける國民の心掛けは、平時のそれとは異らねばならぬ。然らば如何なる點に於て異らねばならぬのであらうか。それは我々が假令、今述べた如く平時の如き仕事を續け得るとしても、我々は其の平時の仕事そのものを戰爭だと心得るべきであらう。國民各自は夫々の職域にあつて、自分の仕事を通して戰爭をしてゐるのだと云ふ事を忘れてはならぬ。近代戰は、常に云はれてゐる如く國民の總力戰である。武器をとつてゐる人々のみの戰爭でない。國民全部を擧げての戰爭である。從つて學生は學生の職域において戰はねばならぬ。學生はいづれ武器をとつて立たねばならぬであらうが、然し其の時が來る迄は、未だ戰つてゐないのではない。既に戰つてゐるのである。學生として戰つてゐるのである。敵國の學生に對して學生として戰つてゐるのである。特に敵國の學生と、學問の上に於て戰はねばならぬ。敵國の學問と文化とを征服し得る所の我が日本の學問と文化との建設に邁進しなくてはならぬ。

如何に武力に於て勝利を占めても、思想と文化とに於て逆に征服されると云ふ現象は、人類の歴史の上に於て屢々見られた所である。のみならず今時の戰ひは、始めよりして明白に思想戰であり文化戰であると云はれてゐる。私は更に學問戰だと云つてもよいかと思ふ。此の思想戰と文化戰と學問戰とを背負つて立つ特權と義務とを持つた者は、學生殊に大學教育を受けつゝある學生であると云ふを俟たぬ。わけても今時の大東亞戰に於ては、我が國日本が大東亞共榮圏確立の指導者を以つて任じてゐる以上、武力戰の破壞につゞく建設の仕事としての大東亞の學問と思想と文化の事に當る人々は、今の學生諸君でなくして誰であらう。

思ひを此處に致す時、現在戰時下に於ける學生諸君の任務たるや實に重且つ大なりと云ふべしである。今、我々が耳にしてゐる痛快至極の戰捷の結果を最後的に本當に完成するか否かは一つに懸つて今の學生諸君の自覺と洞察と勉強とにあると思ふ。現在、學生は戰勝奉仕に、教練に、錬成に極めて多忙である事は私はよく知つてゐる。又、當然多忙でなくてはならぬ。然しそれだからと云つて、戰時下の學生は勉強を、研究をおろそかにしてもよいと云ふ事にはならぬ。それでは餘りに責務が多すぎると云ふ人があるかも知れぬ。然し學生としての特徴を持つてゐる限り又それだけの義務と責務とが降りかゝつて來るのは當然であらう。重すぎると思はれる程の責任を負ひ得る者にして始めて戰時下の學生たるの資格を持つてゐるのだと云ふ事が出來るであらう。

又一面から考へれば、今迄の學生は餘りにも御目出度すぎ、或る意味では一種の有閑階級とも云へる樣な生活をしてゐたと云つてもよい樣な側面がなくはなかつた。それと同時に自然、學生としての職の本分に對する自覺が失はれ、だらしなくなり、世の中からは學生が不評判であつた事は周知の事實であつた。然し戰爭は此の狀態から學生を救ひ、今や學生をして其の本分と責任とに對して目醒めさせつゝある事は、喜ぶべき現象だと云ふ事が出來よう。私は事變前、我が國の學生一般に共通な享樂的な態度とだらしなさとに對して口を極めて警告の言葉を發し來たものであつた。特に私は今次の獨英戰爭勃發の少し前、獨逸に二回遊ぶ機會を持ち、親しく獨逸の學生生活を見て其の質素さと其の勉強振りとに驚き、それに比して我が國の學生の生活の仕方が一般に華美に流れ、享樂的內容空虛的であるのを實に歎はしく思つてゐたのであつた。之は斷じて學生のみを責めるわけには行かないのであつて、恐らく我が國のインテリ階級に相當深く浸潤してゐた所謂アメリカニズムの影響による事が多いからだと思ふが、今や米英的官能と共に、害蟲の如きアメリカニズムは我が國から徹底的に驅逐追放されて、再び質實剛健な我が國本來の學生氣質が甦へりつゝある事は、學生の爲めに、又我が國の爲めに誠に慶賀すべき事だと思ふ。

兎に角、現在の戰時下に於ける學生諸君に殊更に私が望んでやまぬ事は、大國民の風格を持つ樣に努力する事と、大東亞共榮圏内の諸國を指導する自信と實力とを養ふと云ふ事である。此の事は決して一朝一夕には出來ない。それには、隱れたる修養と忍耐ある勉強とが必要である。我が無敵海軍の勝利の背後には月月火水木金金と云ふ猛烈な一週間があつた事を聞いた時思はず私の瞳は感激に潤うた。準備のない所に何の成功があらうか。徒らに大言壯語する事を止めて、我が海軍の樣に默つて一生懸命と鍛錬と勉強と修養とをして欲しい。私は學生が實際に役立つと云ふ事ばかりを餘りにも高調し、好んで實社會に接し、實社會の眞似ばかりをしやうとする傾向を喜ばぬものである。學生の時代は何と云つても準備をする時代である。準備をおろそかにして實地に飛び込む事は、結局に於て不成功に終るか、成功をしても其の規模が小さい。大成功の背後には、隱れたる而して恐らく面白くない準備の仕事がなくてはならぬ。然し其の眼は常に未來の大目的を睨みつけて爛々と輝いてゐなくてはならぬのである。

新世界觀に生きよ

高　松　孝　治

人間が受ける最もつらい刑罰は、獨房に入れられて室の一方に積んである煉瓦を他方に積み上げ、それが終るとまたもとの處へ積み上げて同じことを毎日繰返すことであると云はれてをる。無意味な世界に人間は住み得ないのである。誰でも必ず一種の世界觀を有しその世界觀が無くなり、人生が無意味になつたら人間は發狂するか自殺するのである。

子供には子供の世界觀があり、成人には成人の世界觀がある。もし子供の世界觀をそのまゝ成人になつても變へることが出來なかつたら實に悲慘なものであらう。それと同じやうに我が日本が斯くも大きくなつて來た時に昔のまゝの世界觀は既に用をたさなくなり、茲に我らは新らしい世界觀に生きなければならないのである。

然らばその新しい世界觀とは何であるかと云ふに、日本が神の國であるといふだけでなく、全世界を神の國にすることが日本國民に與へられた特權であることを自覺し、我らがその神の國建設のために凡てを献げるならば神は必ずそれを完成せしめ給ふと云ふことを確信することである。

この新世界觀はこれまでの我らの考へ方を全く變更することを要求するのである。即ち我らは子供の時から立身出世することを教へられ、如何に過去の偉人が努力奮鬪して名を擧げたかを聞かされて來た。然し新しい時代にあつてはもうそれは許されないのである。自己の名を擧げることでなく、神國日本の名を擧げることが人生の目的となつたのである。そして、神の國建設の爲には自己の名譽も財産も、生命までも喜く献げる覺悟が最も必要なのである。

この獻身といふことは勿論我が國民の血の中にその昔から流れてゐたのである。日本武尊の御東征成就の爲にその身を伯拔海に沈め給うた弟橘媛をはじめ人柱となつた人々の數は實に無數である。今日の我が陸海軍の驚天動地の大戰果も軍艦、潜水艇、飛行機などが軍人を運んだのでなく、太平洋に人間の目に見えぬ人の柱が無數に打ち立てられてをるからである。神の國の人柱こそ新しい時代の人の最大な任務である。如何なる困難な事業も人柱を立てるならば必ず完成出來る。如何にしても破れた河内の茨田の堤や長柄川の堤が人柱によつて完成せられたといふのは單なる昔の物語ではない。その人柱は今もなほ生きて我らに呼びかけてをる。聞く耳あるものには聞える筈である。

然しこの人柱、即ち獻身については細心の注意が肝要である。神に獻げるのであることを忘れてはならないのである。神に獻げるものは何物でも初穗で最も清淨なものでなくてはならないといふのが古から我國民の傳へ來つた尊い思想である。つまらない、汚れたものを獻げることは冒瀆である。茲に青年學徒の進むべき道が示されてをる。身心共に清淨無垢に鍛へ最も立派なものに作りあげて之を神の國建設の柱として獻げることこそ青年學徒の唯一の道である。蟲の食つた汚れた柱では神の國を建てることは出來ないのである。

然らば神の國とは如何なるものかといふに一口にして云へば、眞、善、美の國である。そしてそれは過去の世界の歴史に現れた多くの國家の如く一時盛大に榮えて遂に滅亡する如きものでなく、永遠な國家である。この神の國即ち永遠な國家建設を世界觀として立つものは生死を超越してよろこんで國の柱となるのである。その昔キリスト教徒が「我思ふに今の時の苦難は、我らの上に顯はれんとする榮光にくらぶるに足らず」と言ひ得たのはその故である。艱難、苦難、迫害、飢餓、裸體、危險、刀劍も永遠の勝利を確信した彼らを恐れさすことは出來なかつたのである。西暦百十七年頃にローマで殉教したイグナチオスがローマのキリスト教徒に書き送つた手紙にも左の如き節がある。

……我は神の小麥であつて野獸の齒で粉にされるのである。それは余がキリストの清きパンとなるためである。野獸が我が墓場となり、我が肉體の跡形も無くなり、我が死後誰にも迷惑を掛けることの無きよう諸君は野獸を誘惑せよ。我が肉體が此の世に於て見られなくなつた時こそ我は眞にイエス・キリストの弟子となるであらう。此等の道具（野獸のことである）によつて我は獻物となり得るやう諸君は我爲にキリストに祈れ……。

斯かる人柱が無數にあつたからこそキリスト教は二千年間あらゆる困難に遭遇しながら今日まで生存して來たのである。我らも永遠の神の國建設の新世界觀をもつて勇ましく人柱となるべきである。

大東亞民族の潜勢力

十　河　佑　貞

艱難汝を玉にすといふ格言のとほり、人間はどうしても困苦と闘つて、自己を鍛へなければならない。ムッソリーニやヒトラーなどは此の點において、ルーズヴェルトよりも遙に修錬を積んでをり、深く道義に徹したところがある。勿論イタリヤとドイツの國家的環境が歴史的にも地理的にもアメリカと違つてゐるところに由來してゐるけれども、ルーズヴェルトには、ムッソリーニやヒトラーに見られるやうな自己一身を國家のために打ち込んで顧みないといふ、あの烈々たる氣魄などは毛頭みられない。また假りに國家のために自己を犠牲にしようとしても、現代のアメリカの何處に、其れに足るだけの立派な國家があるであらうか。

ABCD包圍陣といふ對日經濟外交は、淺薄なヤンキー婦女子を喜ばせるには、如何にも體裁のよい外形の整つたものであつたであらう。しかし其れは、武の精神を解しない者が、徒らに金に飽かせて武裝を凝らして得意がつてゐるのと同然であつて、既に軍神から見棄てられた邪道に墮したものであつた。米英の政道は、確に黄金に毒されたるものであつて日獨伊三國の共同目的たる世界新秩序の精神とは絶對に相容れないものである。アングロ・サクソンの勢力は、ヨーロッパからもアジヤからも次第に追ひ出されつゝある。彼等は僅かに中南米の諸國に縋り着かうとしてゐる。今や米英二國は昔スペインが世界の富を獨占しようとして失敗したやうに、彼等の利己的貪慾の犠牲を擴げながら、敗退の一路を辿りつゝあるのである。

まことに大東亞戰爭は、アジヤのなかから生じたアジヤの力であり、日本のなかから起つた日本の力であつて、過去百年の長きに亘つて、吾が東亞の世界を侵略したる米英二國の惡辣なる政策を膺懲せんとする建國の利劍である。而して近世における西力東漸の歴史の上から言ふならば、今回の大東亞戰爭の勃發は、まさしく東洋近代史の總決算を成すべき劃期的意義を有するものと謂ふべく、大東亞諸民族の包藏せる潜勢力の一大顯現であると云ふことが出來る。

嘗つて岡倉天心が、アジヤは一つであると喝破した如く、アジヤは詩の世界であつた。美しい藝術の世界であつた。道徳の世界であり、精神の世界であつた。唯西洋の物質文明が、西洋の物質文明を以てアジヤを植民地化しようとしたゝめに、アジヤは分裂したのである。しかして最も勢力的に、最も我が物顔にアジヤを植民地化しようとしたものが、アングロ・サクソン民族の飽くなき營利主義であつたのだ。

しかしながら西洋の物質文明は今や其れよりも進んだ日本の物質文明となつてゐるのである。そこには、吾々の先驅者の獻身的努力の尊い歴史がある。新井白石の識見、杉田玄白の苦心、林子平の海國論、その他、高野長英、渡邊華山をはじめとし、多くの洋學研究者によつて積重ねられて來た日本人的自覺の精神、更に明治になつてからは、幾多の俊才が歐米に留學して、心血を傾いで造りあげた諸科學の研究業績は、畢に今日に至つて科學日本の榮譽を誇るの結果となつたのである。

もはや現代のアジアの文明は、西洋に對して負けてゐるものは無くなつたのである。大東亞民族は今日眞のアジアに還りつゝあるのである。香港に、フイリツピンに、マレーに、ボルネオに、セレベスに、我が陸海皇軍の征くところ、大東亞の民草は、すべて輝かしき皇道の下に[illegible]の夢を貪りつゝある。この南方未曾有の世界史の大轉換期に際して、學生諸君は一層識見を高め、吾等の先驅者の苦心努力の跡に深く思ひを致し、大東亞共榮圏の建設と維持のために身命を抛つの一大犠牲の精神に徹底しなければならぬ。

（一・一六）

決戰下に於ける學徒の思想と生活

飯　田　堯　一

福音書における最高最深の思索的表現と言はれるヨハネ傳第一章第一節の「太初にロゴスありき」のロゴスをば「道」と支那譯したのを日本讀みにして「ことば」と和譯したのは含蓄餘りあるものであるが、これをただ「言」と譯すことが最適であるか什麼かはギヨイテさへ懸案したではないか。彼は苦心の果てに「太初に行事（タアト）ありき」と譯して辛うじて滿足した。まことにこの聖句こそ歐洲近代思想の鋒火だと評されてゐる。「言」から「行」への轉換、否言行一元と洞察した點に深義が存する。カントとても同語異曲で理論と實踐との矛盾に惱み拔いた果て彼れは辛うじて「實踐理性の優位」で難關を突破し去つたことであつた。

由來西歐的思想には二元論的對立の矛盾性が隨所に横たわつてゐる。特にユダヤ國に端を發したキリスト教的がその神秘的世界觀を構成するに及んで斯の矛盾性、對立性は掩ふ可からざる高度と深度とを示した。所謂、神人隔離の教相は神と世界、現世と來世、靈と肉、國家と教會等々の對立觀を激成し生活化さへするに至つた。我と汝、個人と社會、資本と勞働との分裂にまで成り了した。

東洋的なもの、特に日本的なものへとの轉は反省的には極めて價値高く根元的なものへの或る轉換さへも示唆されてゐると看るべき理由もあらうが流石に該の理論付けは未だ以て完成されてはゐないと評するのが公平であらう。藤田東湖でさへ「神州之雄ヽ基、質有餘而文不足」と言つてゐる。が、理論付けが出來上らないからとて言說の現事實を承認し得ないことは無い筈である。少くとも現實の映像（テレヴイジョン）だけは把捉されないことはない。即ち一元論的世界觀──神人一味、物心不二、君臣一體、生成、中、和等々。特に「大和」の國名は「産靈」（むすひ）信仰と「照靈」（てるひ）信仰とに根ざせる日本國體の特異性として否、その本質的なものとして一切に優位する無上命法として。

○

青年學徒の思想生活が國民的のそれと分離して考へられるものでないことは言ふだけ野暮である。思ふても見よ、ドオイブア海峽を突破しての英本土上陸作戰よりは太平洋を飛び越えての米本土上陸作戰の方が遙に可能性が多いと考へらるゝ時勢ではないか。[illegible]古今を曠ふする東亞共榮圏の確立と世界新秩序の建設とを目指す高度國防國家的活動を離れて何處にわが大日本國民の實踐を否、存在理由さへも見出すことが出來やうか。大日本學徒としての理想も現實も理論も實踐も總て一切が斯の世界的「國産み」の神話から發出されねばならぬ。日の丸の旗を仰ぎ見て民一億は一心推れ火と燃ゆる熱血の奔流であるといふ事實其者に大日本國民の思想生活の源泉を、從つて大日本青年學徒の思想生活の淵源を汲むべきであることは明々白々。

辭別け、伊勢に坐はす天照大御神の大前に白さく、皇神の見霽し坐す四方の國は天の壁立つ極み國の退き立つ限り青雲の靄く極み白雲の墜り居向伏す限り、青海原は棹柁干さず舟の艫の至り留る極み大海原に舟滿ちつゞけて陸より往く道は荷結ひ締堅めて磐根木根履みさくみて、馬の爪至る限り長道間なく立ちつゞけて、狹き國は廣く峻しき國は平けく遠き國は八十綱打かけて引寄することの如く皇大御神の寄さしまつれば荷前は皇大御神の大前に横山の如く打積み置きて殘れるを平らけく聞しめせと宣る

（大嘗祭祝詞──延喜式）

何たる尊くべき畏むべき「大嘗言」ではなからうか。これをしも「啓示」と言はずして何とせう・「大日本は神國也」との眞面目を自覺させられるではないか。

○

ナチスやファッショの主張するところ、理想とするところと我が皇道との間に相通し、相共鳴するところのものあることは三國同盟の根柢深刻にして不拔であることを裏書する鐵證である。彼れナチスがゲルマン民族の原始信仰に精神生活の基調を求めんと欲し、ファッショが大羅馬帝國の昔を今に戻さむと憧憬する如き、まさに我が皇道の維新精神に出發するのと靈肉相通し規範相照すものがある。維新即復古、復古即維新といふ皇道の原理は歴史觀的方法の思索にも叶ふて日獨伊三國共通の國家原理であり政治原則であるとも言ひ得るだらう。

が、ヒツトラーやムッソリーニが如何に努力し精進し敢鬪し、全能の神に祈禱までしても達成され得ない唯一つの事實、內容がある。天壤無窮の神勅と萬世一系の皇統がそれである、斯の事實と內容とは文字通り世界無比、獨自獨特の存在に甦しまして我が皇國の中心たるのみならず世界萬國の仰いで以て範と認めざるを得ないこととなるだらう。「萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむ」との聖旨のほどを畏むは外の何物でも有り得ないのである。「大義を八紘に宣揚し坤輿を一宇たらしむ」とも仰せられてある。孰れも三國同盟時に降し賜はりし詔書に明示せられ給ふた。

畏くも宣戰大詔、十二月八日の宣戰の詔書に燦然として輝き映え給ることが新世界史の冒頭に燦然として輝き映え給ふことであらう。米英撃滅の天意を體せられ破邪の劍を揮はせ給ふ大御心も「東亞の安定を確保し以て世界の平和に寄與する」こと即ち「萬邦共榮の樂を偕にする」以外の何物でも有り得ないとの仰せである。

惟神の大道も、皇國の精神も、國體の本義も斯の兩詔書を奉戴し之を研鑽しまつらずる時ほど即ち決戰時下に於ける國民の、而して學徒としての思想と生活とを自省し熟慮する時ほど感激と決斷とを覺えさせられる範囲は未だ嘗て無いと云ふことは一億國民の一人一人が必然的どころか有史以來人類の初體驗でもある現實に直面しては最早言說表現の限りでは有り得ない。默々の中に神感あるのみであらう。「太初に行事（ロゴス）ありき」である。

○

今やわれらは大命を奉じて右手に米英打倒の破邪の劍を揮ひ、左手に獨伊結盟の覿正力を驅使する。何たる光榮、何たる冥加であらう。一身以て一擧兩刀の活人劍を縱横無碍に揮ひつゝ西はカムチャッカより南は濠洲、東はアメリカ大陸まで──[illegible]の限り根の限りきまでに。前線も銃後もあつたものではない。教授も學生もあらばこそ。一心だ、一體だ、一億一心だ、君臣一體である。これが皇國の有りのまゝの相貌であり、あらねばならぬ姿容である。

第二回

大詔捧讀式擧行

昭和十六年十二月八日畏くも米國及び英國に對して戰を宣し皇國の大道と國民の嚮ふべき所を昭示し給へる大詔を渙發あらせられた。實に此の日こそ皇國に生を享くるもの、齊しく永遠に忘る能はざる日であり新秩序建設の大使命の貫徹せられたる記念すべき日である。

仍て玆に政府は大東亞戰爭完遂のため必勝の國民士氣昂揚に重點を置き健全明朗なる積極面を發揮することをその方針とし、昭和十七年一月以降大東亞戰爭の完遂に至るまで毎月八日を以て大詔奉戴日と定めたのである。

去る一月八日この日一點の雲なき日本晴れ、屋上に上れば白く聳ゆる富士を仰ぎ、折から上空には陸軍始め觀兵式に參列の陸鷲が堂々の編隊をつらねて壯麗な威容を現す。學期始めとは云へ我學全學生二千は午前十時中庭教練場に集合し、第二回大詔奉讀式を擧行、國歌奉唱の力強き調べは大きく[illegible]、總長よりの示達あり、學徒たる者の責務の重大なることを強調し以て學徒の進むべき道を明示しこゝに意義深き奉讀式を終了した。

集合せる學生一同は深く感激し、必勝の決意に燃え、皇軍の赫々たる武勳と銃後における學徒の[illegible]なる生活の[illegible]を新たにしたのである。

纖維製品綜合切符制實施

戰時經濟に於ける劃期的意義

政府はかねて纖維製品に對する全面的かつ綜合的な配給消費の統制を企圖し、商工省を中心として愼重研究を進めつゝあつたが、今回制定せられたる衣料品切符制は、わが戰時經濟の推進上誠に劃期的意義を有するものである。すなはち直接には消費の規正を目的としてゐるが、政府はこれに依つて需要の傾向と最低必要量を正確に推定し纖維政策遂行の基礎たらしめんとすると共に配給の公平を期し、さらに必需纖維製品に重點を置く合理的計畫生產を遂行せんとするにある。

この新制度はわが國家目的を完遂する上に極めて必要なる條件の一つではあるが、これが實施に伴[illegible]た。從つて今回の斷乎たる處置は、その犠牲者である業者諸君への同情は暫らく別として、[illegible]した觀がある。他面これが整理に依り吐出せられた餘剩勞働力、資本、設備資材は國家の最緊急とする生產部門に集中せられるであらう。

さて時局の要請に基いて國民生活の最低限度における衣料品消費節約が斷行されたのであるが、これが國民生活に及ぼす精神的影響は極めて大である。すなはち從來と綜合切符とのリンク制實質は全然を自由にするものが自由に無限度の購買力をもつと云ふやうな在來の社會現象を消失せしめる結果となつた。今日よりは富めるものも貧しきものも老も若きも等しく最低の生活で頑張るのだ。そして非國民的な買溜も、見苦しい店頭の行列買も、更に時局も知らぬげに[illegible]した有閑人も自然淘汰されるであらう。最も快事とするは眞面目なる社會人よりその優柔と缺陷を問はれ、學徒たるべき學生の面目を失墜せしめた一部墮落學生が學校當局の處置をまたずして跡を斷つであらうことである。學生は爾今その實質と體驗とを社會に誇示すべきである。

殊に今回の綜合切符制度が個人單位に基く點、家族制度に基く代理購入を認めた點、就職、結婚に當り特例を許容した點は賢明の措置と云へよう。欲を云へば職業別に依る取扱を一層適切に扱つて頂きたい。敢て學生の立場を代表して一言附加する。

最後に今度の切符制に依り當然齎らされた國民必需數量、これだけの供給は萬難を排しても確保する信念と責任を當局者は保持せねばならぬ。更に民間ストックの減退に即應して供給を增加する必要あるに於てをや。更にまた廣大な東亞共榮圏の衣料を賄ふ義務を負ふ生產部門は內需の確保を乘り越へて更に一段の生產擴充が要請されてゐる。大東亞戰爭は一面長期戰であると同時に他面長期建設戰である。

從つてこの長期の戰爭を勝ちぬくためには國民の最低生活水準にも一定の限界が存してゐる。國民は最低の生活に喜んで耐へよう。然し技術上の缺陷の爲に配給機構が圓滑を缺いたり、或は一定の限界が破られる樣な事が惹起したらその恐るべき影響は徐々に國民の體位を更に精神をまで蝕喰し、勞働力の維持培養は勿論のこと、生產そのものゝ低下を來たし建設戰の遂行を不能ならしむる惧れなしとしないであらう。されば當局者は切符制の實施に當り配給機構の整備、地域的偏在の防止、品質の確保と向上に愼重なる關心を拂ふべきである。これは國民生活の安定と生產力の確保に最緊急事と云へよう。

保健飲料
として誇れた休息の友
純國產
日東紅茶

一變する世界地圖

伸長する大東亞の勢力

鶴見氏講演會

香港、マニラと米英の東亞侵略の據點は皇軍の疾風迅雷の如き進擊に既に陷落し、又今やイギリスが「東洋のジブラルタル」と自負し、對日包圍陣の要として恃んで來たシンガポールの運命は、風前の灯でしかなくなつた際、海外事情研究會主催の下に、大東亞戰爭勃發の直前迄、彼地に於て活躍せられ現地事情に精通せられる前シンガポール總領事、鶴見憲氏を招聘して去る二十三日午後三時より二十番教室に於て、講演會を盛會裡に開催した。同講演要旨は

シンガポールは、今や日本全國民いや世界の關心の的となつて居る。米英と日本は必ずや將來に於て、衝突すべき運命にあることを私は確信して居た。日本が三國同盟よりの脱退、又大東亞共榮圏確立の國策を抛棄せざる限りに於て、そして其の決戰の場所として、シンガポールが選ばれることを。私は、現地に於て、英國の植民政策の搾取の、苛酷さを目前に見て來た。私は、學生時代に先生より「オランダは、搾取を苛酷に實行した故に植民政策を失敗した、併るに英國は搾取の植民政策を行はざる故に成功した」と聽かされて來たのである。もし諸君の中に於て斯樣なる考へを信じて居られる人が居るとすれば、それは大きな誤信である、決して英國は搾取の植民政策を實行しないのではなく、其の搾取に武力と云ふ存在があつたから成功したのである。

英國は紳士を代表する國と云はれて居るけれ共、それは彼等が優越なる地位にあつた時にのみ紳士なのであつて一度び攻勢の立場に立つた時、彼等は決して紳士ではなくなり、ジョンブルの眞の姿を露呈せずには、をかないのである。私は、大東亞戰爭勃發直前に、シンガポールから陸路泰國に入り、河内に於て、宣戰の大詔を拜聽したのであつた。今迄日本は、米英に對して直接に武器をとらざる戰を行つて來た、併るに今や日本は自衞に依つて、實に明朗たる立場に於て戰ふことが出來ると。彼等は佛印への日本の進駐を侵略行爲として攻擊し、英のイラン、イラクへ兵を進めたることは正義の行爲なりと、實に考へ及ばざる程の獨善さである。それは即ち世界制覇を野望する米英の眞の姿を證明するものでなくてなんであらうか。我々は斯かる彼等をして徹底的に打破することを期さねばならないのである。（中略）戰前に於ける彼地の言論は挑發的言辭に終始し日本をして、過小評價して居た。之は實に我が國に、幸ひせしめたところである。一新聞は社說に於て、シンガポールの陷落は考へられないと冒頭に擧げ、もし陷落したならば、其の時から世界歴史の一頁が塗替せられるであらうと、併しハワイの米海軍主力にして、その緊密なる關係に於ては、考へられない戰だと。併るに十二月八日、ハワイ、シンガポール同時攻擊が行はれたのと思ひ合せて、私は感慨無量なるものがある。

シンガポールが陷落したならば實に世界の歴史は輝しき新紀元を劃するのだ。私は其の後の大いに期待するものである

と結び一時間半に及ぶ講演を終つた、尚海外事情研究會は、本年より一ケ月二回の定期講演會を開催し、現下時に緊要とせられる海外事情の智識啓蒙に努むる由にて居る。

振勵會主催

豫科耐寒驛傳競走終了す

去る一月十七日朝來の快晴に惠まれて豫科振勵會主催の下に第三回豫科耐寒驛傳競走大會が華々しく擧行された。此日午前八時全員豫科校庭に集合、宮城遙拜、皇軍將兵に對する感謝默禱、次いで會長の訓辭、チャレンヂの返還が行はれ、竹村委員長の挨拶の後選手の力強い宣誓があり、直ちに競技に移つた。コースは本學正門前を起點として[illegible]に至る川越街道往復二五粁で正十時先づトップを承る十八人の選手達はクラスの名譽を双肩に擔つて勇躍そのスタートを切つた。四仲繼所に夫々配置された應援隊の熱狂的聲援は激化する沿道市民の歡聲を浴び乍ら日頃の鍛錬の成果を遺憾なく發揮して選手は力走又力走し一時間足らずして二年A組はそのトップを切つてゴールへ突入し茲に榮ある優勝の榮冠を獲得したのである。午後二時より總長挨拶、講評、賞品授與が行はれ、本部萬歲三唱に依つて目出度く本大會の幕が閉ぢられた、當日の成績は左の如くである

組對抗入賞者

一位　二A　九三分三〇秒

二位　二E　九四分〇八秒

三位　三A　九四分三九秒

四位　一D　九五分四二秒

五位　三E　九五分五二秒

六位　三B　九七分一二秒

組別ブロック・ペナント

一位A組（四四點）二位E組（三九點）三位D組（三六點）個人成績では一E木村（敬）君の八人拔が秀逸

尚腹痛を我慢して最後迄頑張り遂にゴールに入るや力盡きて卒倒し入院した一C崔殿君の敢鬪は讃に激賞に値するものであつた、又本大會の爲に骨々と骨を折つてくれた振勵會の役員並びに陸上競技部カメラ部、自轉車部、自動車部の諸兄の努力には全員感謝の意を表してゐる

尚競技部福島主將は次の如く語つた

振勵會と共に誕生した本大會も回を重ねる毎に盛大となり、競技の運用にも相當の進歩が見られたのであるが、今年は授業開始後間もない中に開かれた爲か練習不足で豫期された程の成績が得られなかつたのは遺憾であつた。凡そ驛傳競走は不斷の練習と不屈の精神を要する競技であり、一絲亂れざる意志を必要とする云はば全體主義的スポーツである點は未曾有の大戰爭下に置かれた吾々學徒の心身鍛錬の具として將に最適のものと言へよう。未だ改善すべき點は多々あると信ずるが次回よりは厚生本部主催の下に豫科のみならず學部をも之に參加せしめ、之を全學的な行事とすべきだと思ふ

飯塚浩二教授を圍む

東亞共榮圏の經濟地理的考察

本館一號室にて

我國は今や國家の總力を擧げて大東亞共榮圏建設の大事業に邁進してゐる。この建設たるや廣大なる地域にわたりて各種の民族と相倚り相携へて共存共榮の新秩序を建設せんとするにある。しかも新にこの建設に參加せんとする地域は資源は極めて豐富ではあるが、最近百年の間、英米兩國の詐偽なる搾取と惡辣なる政治手段に依り政治的に經濟的に思想的に極めて憂ふべき狀態にある。而して之が施策は複雜多岐にわたり將に至難の業と云ふべきであらう。かゝる現下の狀勢に鑑みて人文地理的知識、特に經濟地理的考察の要請されること今日程緊要なるはないであらう。

こゝに於て經濟學會は總人會諸兄の要望に應へて一月二十三日午後七時より經濟地理學會の飯塚浩二教授を校友會館の一室に招いて〝東亞共榮圏の經濟地理的考察〟と題する講演會を開催し非常な好評を博した

右に關し飯塚教授は語つた

前號に掲載した僕の論文を一層詳細に聞きたいと總人會諸兄の希望もありましたので、補足と云つた意味で第一にアジヤに於ける日本の地位、即ち歐米勢力に對するアジヤの反撥力としての日本の地位の向上を戰爭との關聯に於て採り上げてみました。特に日露戰爭はこの意味でアジヤ民族に與へた精神的影響は大であつたと思ひます。第二にヨーロッパからアフリカにかけての歐亞廣域經濟圏、北米から中米南米を縱貫する汎米廣域經濟圏と東亞共榮圏との經濟地理的相異。第三に共榮圏確立の與件についての私見を纒めてみました」と結ばれた。

臨戰體制下

學部學年試驗發表

本學年度の總決算たる學部學年試驗は、從來は三月上旬に行はれて居たのであつたが、來學年度よりの學部の大改革に伴ひ、本年度に於ては例年より一ケ月繰上げられ、二月五日より十七日迄の期間に施行せられる事となつた。略ち去る廿日に發表せられた日割に從へば、其の間の祭日、日曜並びに九、十日に實施せられる行事を除いて經濟學部に於ては八日間、文學部に於ては七日間に亘つて行はれ一日より四日迄の休講と共に其處に相當の餘裕が見受けられる、試驗當日第一時限は、午前八時四十分より十時十分迄、第二時限は十時半より十二時迄、第三時限は午後一時より二時半迄、夫々一時間半で、經濟學部は語學を除く全科目、文學部は全科目を行はれる。

大東亞戰下、太平洋に、マレーに、比島に、皇軍は無敵陸海軍の威力を發揮しつゝある現在、吾學學生は其の本分を嚴守し、今學年を有終の美を以て終了するよう一層の努力を希んでやまない。

尚學校當局として、止むを得ざる事情のほかは出來る限り、[illegible]に差支へぬ樣に、又各自其の他の事故のないことを切望してゐる。

厚生文化の夕

常松氏の美技

さきに東日主催第十回音樂コンクールに見事入選その前途を嘱望された本學英文科の常松之俊君は一月十七日神田一ツ橋共立講堂に於て開催された文化學院主催の日獨伊枢軸厚生文化の夕に、ソナタ二短調（ベートーヴエン）、ハバネラ（ラヴエル）無言歌（メンデルスゾーン）アレグロ・アパッショナータ（サンサーンス）のセロ獨奏を行ひ、その美技を遺憾なく發揮し聽衆を恍惚たらしめた

門扉應召

本學では昨冬公布された金屬回收令に鑑み、校舍の金屬造物を獻納せんが爲、調査の結果、此の程第一回の召集物として正門、學生通用門、豫科通用門等が獻納される事に決定した。

此等の門扉は立教大學創立以來幾多先輩が先輩を社會に送り、學びの學園として默々して來た、親しみ深き記念物であつた丈けに此の度の獻納に愛着心こそあれ、國[illegible]學生諸君の熱烈なる來援を期待致迎して居る

適材適所の勞力奉仕

技術利用の自[illegible]

大東亞決戰下、特に機械[illegible]の方面に於て、人員不足を告げてゐる今日、吾等に於ては、[illegible]工業に於て、總員十二月二十四日より三十日に至る一週間勤勞奉仕を行ひ、[illegible]の實際を體驗し併せて、國防目的事業として[illegible]を果し得た

參加者は、總本主將以下二十二名各々二ケ所に合宿し、午前中は作業に從事し[illegible]床、就寢九時に至る迄、全[illegible]式の規律の下に生活を行つた。我々の作業は、[illegible]工場より[illegible]に至る車輛の整理を行ふ[illegible]り、工場內に於ける車輛整備に從事した。[illegible]場に入場し點呼を受け、七時三十分より宮城遙拜、ラジオ體操を行ひ、それより作業に取りかゝる。午前中の作業は何と云つても運く、ボデー取付前の車輛の整理であつた[illegible]

學生募集

豫科
募集人員──[illegible]──二四〇名
出願期限──自二月二日 至二月廿五日
試驗期日──三月九日
試驗科目──國語・代數・平面幾何・英語

學部
文學部──英文學科・史學科（?）──各科若干名
經濟學部──經濟學・商學──各科缺員ナシ
出願期限──二月十六日ヨリ 三月十四日マデ
試驗期日──三月十七日

☒入學規則書送呈

東京市豐島區池袋
立教大學

立教大學經濟學會誌原稿募集

主題　經濟學一般

枚數　三十枚內外（四百字詰）

締切　三月十日限り

フランス人の生きる道

ドリユ・ラ・ロシエルは叫ぶ「フランスの再建は今なほ
可能である。そこにはなほ創意豐かな、予測し難い
精神に富むフランス精神が存在してゐる」

河盛好藏

私は最近、敗戰後のフランスの體驗を傳へる二つの良い本を讀んだ。一つはブノア・メシャン著井上勇譯「四十年の敗戰」（富木書房）であり、他の一つはドリユ・ラ・ロシエル著新庄嘉章譯「フランスの生きる道」である。ブノア・メシャンの方は、ドイツ軍に捕へられた俘虜の手記であつて、歷史的な敵對關係にある獨佛兩國民の火花を散らすやうな精神的力鬪を具さに傳へてくれる非常に面白い讀物であるが、さうして我田引水と言はれるかもしれないが、新しい歐羅巴を建設するためには、フランス人の知的、精神的協力なくしては絶對に不可能であることを感じさせる書物であるが「四十年の敗戰」について話すことは他日に讓つて「フランスの生きる道」について若干の感想を陳述してみたいと思ふ。

作者ドリユ・ラ・ロシエルはフランス文壇の中堅どころの小說家であつて、わが國では名作「夢みるブルジョア娘」が堀口大學氏の好譯によつて知られてゐる。（不幸にしてこの飜譯の下卷、この小說の名作たる所以を如實に示す部分がまだ刊行されてはゐないけれども）

飜譯第一頁は「一人の男パリ市中を歩く」と題されてゐる。即ち敗戰を解かれると同時に失業者になつた一人の男が、朝から晩までパリ市中を歩きながら祖國の運命と過失についていろいろと考へるのである。たゞフランスは敗けたのであらうか。なぜドイツ軍はあんなに强かつたのであらうか。それはフランス人が誰も彼もブルジョワになつてしまつたからであつた。ブルジョワであるといふのはブルジョワ風に生活するといふことであり、他のことを考へる前に先づ馬鈴薯をそへたビフテキを夢みることである。フランスの軍隊は、敗戰から兵營にいたるまで、專ら[illegible]と酒のことばかり考へ出來るだけ少なく働からうと思つてゐる連中ばかりの軍隊だつたのだ。それに反してドイツ軍は何一つ行き當りばつたりなことはせず、楔止めするやうに一つ一つの攻擊を秩序正しく整理しつゝ、物凄い攻擊をし、朝から晩まで自らを鍛錬してゐた、そのやうな立派な軍隊だつたのである。

しかしこの男は感心に、戰爭に敗けた責任は當然彼自身も負はなければならないことを知つてゐる。從つてフランス人の誰もが他のフランス人について、「彼奴が……彼奴がこのことを理解してゐなかつたのだ。彼奴があれをしなかつたのだ。」などと話してゐるのを耳にすると彼はかつとなつてしまふのである。フランス人の犯した最大の過失は、自分達の個人的な責任を回避し、もつと呑氣にやつて行くために、同盟者を獲得するといふ、新しい手段を考へだしたことであつた。だが天は自らを助けないものを決して助けてくれはしなかつたのである。戰爭に敗けると直ぐに背任者呼ばはりをしたり、また近隣の當にもならない小さな國々を語らつて共同戰線を張るのは、こんどの大東亞戰爭に於ても英・米兩國の盛んに愛用する手段であるが、殷鑑遠からず、これだけを見ても英・米が我々には絶對に勝てないことは明瞭である。いまにアメリカでは火星にまで援軍を求めるかもしれない。

閑話休題。この書物のなかゝら心にとまつた言葉をアト・ランドムに引用することにしよう。

「私の怖れてゐたのは、フランスの肉體に對する新しい歐洲の肉體の出現であつた。即ち我々が國際試合に於て常にその前に屈服しなければならなかつたイギリスやアメリカの肉體に益々近似して來るドイツの肉體の出現であつた。私は、旅行から歸つて來て、ポケットに兩手を突込み、肉のたるんだ太鼓腹をつきだしてゐるフランス人の肉體を見る毎に……旅行中私は、肉の落ちた頰を痙攣させて、フランス人を眞似るやうな知識人の前で講演などはしなかつた。私は、わがフランス人とは反對のものを觀察したのだつた。さうした、わがフランス人とは反對なものに直接ぶつつかつて、悲痛な氣持を覺えたのだつた。」

「民族の祭典」といふ映畫はフランスでも大變に好評であつて、殊にあのなかでヒットラー總統が自國の選手がマラソン競爭で[illegible]を爭ふのを見てやきもきする場面は、總統の「碎けた人間的であることを示す光景」としてフランス人に非常に好感を與へたと聞いてゐる。しかし、もしフランスに本當の偉い政治家がゐたら、あの映畫を見たゞけでドイツと事を構へることの愚を痛感した筈なのであるが、多くのフランス人は希臘彫刻でも見るつもりであの映畫を鑑賞したに相違ない。恐らく「民族の祭典」はマジノ線を突破した最初のドイツの時計爆彈であつたのだ。たゞ爆發の時間が長すぎただけの話である。

ドリユ・ラ・ロシエルはまたフランスの誰一人として省みなかつた大いなる事實のなかに、次の如きものを數へてゐる。

一、十八世紀に於ては二千四百萬のフランス人に對して、ドイツ人は二千八百萬だつた。二十世紀に於ては、フランス人はたつた四千萬で、それに對するドイツ人は八千五百萬である。

一、イギリス人の常識的缺點。ヒットラーの擡頭以後もイギリスは義務兵役制を拒否した。

一、アメリカは常に決斷を下し戰備を整へるに三年を要する。

「フランスの生きる道」の作者はこんな風に、自國の弱點を衝くこと甚だ辛辣であるが、しかし彼はフランス國民の將來に決して絶望してゐるのではない。彼の熱烈なる愛國の叫びを聽かう。

「フランスの再建は今なほ可能である。なぜならば、フランス人は騎士の點に於てイギリス人より劣弱であつたやうに、ドイツ人より人口が少く鑛物の點に於て劣つてゐるが、それでもなほ創意豐かな、撓み難い飛翔に富むフランス精神が存在してゐるからである。生命がある。再創造の絶えざる奇蹟、不滅のもの、驚異的なるものへの轉化を行ふ絶えざる奇蹟がある。あゝ、フランス人よ！諸君は自己を捨て、自己を忘れ、既に久しく自己であつたものを諦めて、いかなる民族と雖もうちに持つてゐる泉、あらゆる奇蹟の泉、生命の泉を諸君の胸のなかに於て搖り起かす氣持を持つてゐないのか？諸君は甦らんとする望み、新しいなにものかにならうとする望み、諸君の魂の中に隱れてゐるあるもの、可能なるあるもの、未だ知られざるあるものを發見する望みを持たないのか？

未知のもの——それは諸君に誘惑を感ぜしめないのか？だが諸君は、かつて多くの旅行者を探見家を、先驅者を輩出せしめたではないか。今こそ諸君自身の[illegible]を發見するために再出發すべき時である」云々

因みに新庄氏のこの好譯は昨年末に利根書房から出版された。

書斎の窓

反省と發足のために

杉木 喬

このやうな激動期のきびしい現實のなかを、身をもつて生きてゆかなければならないのは、われわれ日本人のひとしく分かつべき運命であるが、[illegible]にたゞ一すぢの道を辿らうとすれば、學徒のゆく道も決して平坦とはいへない。己の學問の道をひたむきに進まうとすることも、今はいぢらしい悲願なのかもしれない。きのふの同盟國も、けふは敵國である。目まぐるしい歷史の囘轉に、一々目を廻してゐたのでは致し方もない。しかし、わが戰況ニュースをきくたびに、胸にこみ上げて來る激動がどのやうにはげしいものであるか、決して言ひつくせるものではない。同じ血と土につながるものゝ思ひとよろこびである。われわれ日本人は、この事實を信用するだけの心をもつてゐる。

今から凡そ百五十年前、儒佛の學があのやうに旺んだ時代に、世の心なき外來文化心醉者をいましめた本居宣長も、決して偏狹な外來文化排斥論者ではなく、心のゆたかな文化人、ひろいヒューマニストであつた。「漢意、佛意を、淸く濯ぎ去て、やまと魂をかたくする事を」要とし、「おのれ何につけても、ひたすら漢意をいふは、ゆゑなくみだりに、これをにくみてにはあらず」「たゞ此漢意に心のまどはされゐて、それに妨げらるゝが故」に「此漢意を清く除き去つて、やまとだましひを堅固くすべきことは、たとへばものゝふの、戰場におもむくに、まづ具足をよくし、身をかためて立出るがごとし」と言ひ又「漢籍を見るも、學問のために益おほし。やまと魂だによく堅固まりて、動くことなければ、晝夜からぶみをのみよむといへども、かれに惑はさるゝうれひはなきなり。」（うひ山ぶみ）ともいふ。

「玉勝間」や「うひ山ぶみ」などを讀みながら、わたしはわたし流に、外國文學研究への態度や方法などをじつくり考へ直してゐる。（一・二〇 研究室にて）

評書

日本文學史に現れた萬葉精神への憧憬

——小田切秀雄著「萬葉の傳統」——

水原 博

題して「萬葉の傳統」とされるこの書は、萬葉集と內容とに或る距離を置いてゐて、萬葉集そのもの、乃至萬葉歌そのものゝ研究に追求の眼が注がれてゐるのではない。萬葉人の持つたと考へられてゐる健康な潑剌さと積極さとを今一度當時とは異た形ではあるが呼び返したいといふ憧憬、またその爲めの努力といふ觀點から、日本文學史の、とくに古今集以後の文學史を再檢討して、その大體の輪郭を素描したものなのである。「人間のみづみづしい清純素朴な感情」が「人間の現實の生活のさなかからおのづと發して歌になつたといふこと」それを「可能ならしめた人間生活そのものゝ存在形態」これらのものは萬葉集が日本文化に殘した遺產の大いなるものであらうし、そしてこれを繼承するためには、それ以後のわが文學史を追求して今日のわれ〳〵のありようを今一度反省し、現在と過去との距離を測り、その本質的差別の認識の上に萬葉の精神を繼ぐことが出來るわけである。

この樣な意圖が、平安・鎌倉・室町・江戶の諸時代に發生・展開せしめられた中世詩精神と、明治以後の近代文學とが扱はれてゐるが、左にその大要を述べよう。

氏は中世詩ジャンルの中で先づ新古今集と連歌とを論じ、夫々の詩人の屬する階層は異り、藝術に對する態度は異つても、何も現實からの遊離、逃避を以て特色づけられ、氏の所謂「藝術主義」に纏り、こゝに諦念の世界を形成するものとされる。近世の芭蕉にあつてもこの傾向は打破されるより、むしろ完成せられるものであつて、武家に甘んぜず、町人の俗世界にも飽き足りぬ彼はやがて人間の微小と自然の絶大といふ對照から、人間世界を超えてそれ自體に運行する自然の眞の美とを寫すことに專念するに到る。芭蕉の特色は單なる諦念から藝術主義への安易な路ではなく絶えず自身を責めることによつて、常住不斷に宇宙の神秘なる境に出入し得る如くすることであつた。かゝる芭蕉の自己鍛錬「さび」の世界が客觀的にはいかなる意義を持つたか、この問題に答へて氏は近世詩歌の現實へのイロニーであつたと言はれるが、江戶時代初期の封建期にあつた彼をして「さび」を感ぜしめ、イロニーを持たせずにはおかなかつた動因は何か、近世農業生產における二重の疎隔とその抑止と、これらが擧らるべきでもあらうか。自然の認識は、人間の働きかけと共に豐富にされ、その感性と共に眞に自然の「大」を感ぜしめるものなのではあるまいか。さてかゝる中世詩に異質を放つものとして實朝と良寬とをあげ、前者は新興鎌倉の現實に身を挺せしめたことによつて、後者は萬葉歌風のうちにあつて修養を通し庶民の心情に接近し得たことによつて、萬葉の世界に觸れてゐるとする。以上は中世詩論の概括であるが、何故氏は古今集を扱はないか、また新古今歌人と趣を異にする西行を取上げないか、近世末期の萬葉調歌人を論じなかつたか、もしこれらが前述せられるならば、中世詩史の姿はより豐富により複雜に捉へられ、從つて又明治詩人の姿もより鮮明に浮び上つたであらう。更に萬葉集そのものゝ詳細な研究が深く論ぜられるならば、ひとり中世詩についてのみではなく日本文學の特質なるものが顯現し來るであらう。

次に近代に入らう。近代の特質は小說ジャンルの支配性にありとする氏の明敏が、先づ詩を說く前に逍遙の「小說神髓」を取扱はせてゐる。「小說神髓」の本質を氏は日本文學における近代個性主義的世界の成長と規定し「天は人の上に人を造らずといへり」とした福澤諭吉に倣ひつゝ、かゝる世界觀は封建制度に反撥して、それからの文學の獨立を主張するに至るとする。卽ち逍遙は宣長のものゝあはれ論を參照しつゝ人間感情の解放を論じ「小說の主腦は人情なり、世態風俗これにつぐ」「人情とは人間の情慾にて、所謂百八煩惱是なり」といひ、かゝる人情の描寫にあたつては心理學者の如くすることを、寫實主義の取るべきを說いたのである。かくの如き近代日本文學の方位決定を確認しつゝも氏は言ふ。逍遙の主張は前に人情の世界に躊躇して近代人間の深い內面的把握にまでは至らず、その寫實主義も當然生れて來べき人生批判の意識的な態度が曖昧である、と。「なべて文學の主目的は人生の批判をなさむがためのみと往古の識者はいひけり」といふジョン・モーレイの言を引きながらも、逍遙はそれを强力に主張せず、更に積極的に發展させはしないで、かへつて寫實主義の技術的側面、即ち小說法則としての文體論に向つた。この樣な世界觀の未熟からする主張の未熟は「新體詩抄」（明治十五年）「和歌改良論」（明治廿年）等にも見られる如く、新時代の「事物」と「詞」が問題とせられ「思想」が問題に提出せられる事のなかつた事情と照應する。唯逍遙が小說を正面に押し出したことは、寫實主義の主張と聯關しつゝ、近代文學の主導的ジャンルを自覺的にではないが摑んだものである。かくて近代文學の確立は、小說の二葉亭、自然主義派、俳句の子規、詩の藤村に負ふ所となされるが、特に歌にあつては明星派の「みだれ髮」に於ける人性解放、封建的なるものとの「分離」を通じて自然主義に到ると論じてゐる。これら「小說神髓」論は、恐らくこの著の中の白眉たるものと信ずる。

さて晶子の「みだれ髮」における自我の解放、誇示を高く揚げし、これと樗牛の「美的生活論」に於ける個性の自覺との照應に及びつゝも氏は、近代精神の面においてのみ捉へられた狹さと、その必然の結果として荒々しい人生から「身をくねらせ」古典の世界に夢みがちにならればならなくなつた限界を指摘すると同時に「かくて世にけものとならで相逢ふ」うた「明星」が再び自然主義の日常茶飯の下界に先驅せねば止まなかつた所以にも觸れ來つてゐる。

だがこの樣な限界は「日本近代文學の古典期」と稱される志賀直哉や高村光太郎の足にもからみつく。古典期が「人間の分裂を克服し調和を實現するための强力な努力と鬪ひ」の時期とするなら、直哉における自我の成長への要望と努力、光太郎における「感動の枝葉を刈れ、感動の根を抑へろ」とする自我統一も、客觀世界の克服としてゞはなく、心境的な「統一」として鬪爭するの外はなかつたこの時期に私は氏の所謂古典期なる名稱を暫らく保留したいと思ふ。

最後に現代について明石海人著「白描」讀後の感想として氏は大略次の如く言つてゐる。これを讀むと生命のかけがへなさを痛感する。併し私達はその慘さにふさはしい實際生活を持つてゐるだらうか、私達はそれを作り出して行かなければならない。こゝで私達は「白描」の世界と袂を別つゝ進まねばならぬと。又この樣な歌集の存ぜざらんことこそ望ましいのだと。かゝる人間觀がまた「戰線の夫を想ふ歌」の多くの女性達への暖い愛情となつて沸々と湧く。否ひとりさうした女性には限らない。現代の女性全般の「もつと嚴しく複雜な氣持の面の表現、戰ひの面の表現」に抒情だけでなく思索や追求の側面の表現をもまた求めたい」と氏は切に願ふのである。

作家研究

北村透谷

——一つの覺書として——

田口次郎

「透谷の文學的生涯は彼の早い結婚と共に開けた。人としての彼が歩いた路は近代の生活を考へるものに取つていろ〳〵な暗示を與へる。彼には天才の誠實があつた。その誠實が彼を導いて短く傷しくはあるが、しかし意味の深い生涯を送らせたと思ふ」と島崎藤村は「北村透谷集」の序を結んでゐる。この藤村の言葉を手掛りに透谷のことを少し考へてみたい。

「短く傷ましくはあるがしかし意味の深い生涯」と藤村がいつてゐるのは、いかなる內容の、そしていかなる意味での生涯であつたらうか。彼透谷が若き最愛の妻と愛子を遺して廿七歲の若き生命を彼自らの手でたち切つたといふことだけを指すものでは無論あるまい。透谷は普通には日本近代文學に於けるロマンチシズムの始祖といはれてゐる。彼の著作を讀んでみると、彼が最も普通な意味でのロマンティズムに屬するものでは決してなく、そこを貫くものは烈しい人間尊重の精神であることが分り、それに打たれるのである。彼は人格としての人間を認めることを知らず、又そのやうなものの成長を極めて頑强に阻止してゐた封建制に對して「凡そ社會の組織封建制度ほど不完全なるものはあらず、而して德川氏の封建制度極めて完成したるものなりし事を知らば社會の一方にヂスコンテンシヨンの聲が亦彼の如くに廣大なりしもののあらざりしを知るべし。その不平の聲は尤も深く宿るところは尤も深く人間の靈性を備へたる高尙なる平民の上にあり。阿諛妄慾をもて長上に拜跪するは小人の極めて爲し易きところにして、高潔なる性格ある者に取りて極めて難しとするところとなり」（岩波文庫版八八頁）とし、明治維新をかゝる封建制よりの人間解放——[illegible]——として記述してゐるのである。

併し明治維新は周知の如く古きものゝ排除を必ずしも意味したのではない。一度は打敗されたと思はれたものが、新たなる相貌の下に立ち現れてきたとき、彼透谷の生きた明治廿年代は正にそのやうな時であつた。浪漫的なシュトルム・ウント・ドランクな時期が一應收まり、藩閥と民權派との抱合はなり、政治的にも、とにもかくにも安定期に入り社會は軌道に乘つた時期であつた。而して、そのことは、文學が、近代文學として生誕する地盤の出來たことも意味する。日本近代文學の最初の理論的宣言である坪內逍遙の「小說神髓」の出版されたのが明治十八年であり、四迷の「浮雲」の上梓の現れたのが明治廿年であることがそれを證してゐる。

それはともかく、こゝに注目すべきは、時代が謂はば政治の時代より他のなにものかの時代に入ると、それまで强い關心と野心を政治に向けてゐた靑年達が、それらを文學に向けて來たことである。それは、時代が一應の安定期に入つたといふことからばかりでなく、彼等が彼等の理想を燃やし、そのために鬪はんとしてゐたものが彼等の望んでゐないかたちに決着したといふことにも原因する。彼等の多くは失望といふよりもむしろ侮蔑の情を藏しつゝ政治より退いたのである。

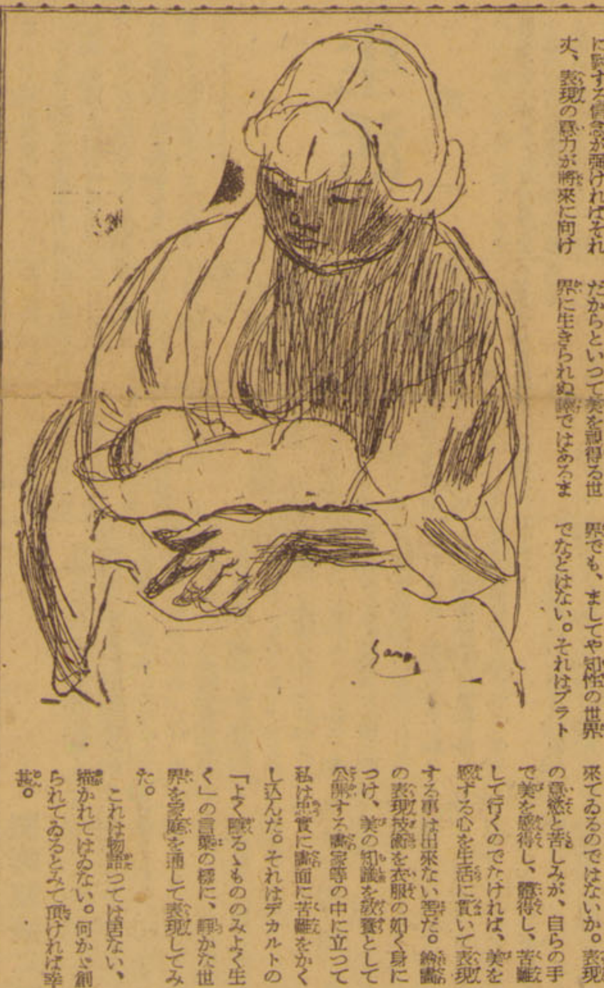
透谷もその一人であつたらう。彼は十五歲の時早稻田專門學校に學び、政治家ならんとしてゐたし、又自由黨左派の大井憲太郎と交はり、大阪事件にも關係してゐたと云はれてゐる。彼自らも「三日幻境」の中に「回顧すれば七歲のむかし我が早稻田にありし頃我を迷はせし一妖魔ありけり。輕々しく、夙に少くして政海の知己を得つ、交りを當時の俊兒に結びて豪縱沈憂のあまり月を弄し花を折り」云々、又「三たび我が行きし時に蒼海（引用者—大井憲太郎を指すか）は幾多の少年壯士を率ゐて朝鮮の軍に與らんとし、……この時に至りて我は既に政界の醜狀を惡くむの念漸く專らにして、利劍を把つて義友と事を共にするの志よりも、靜かに白雲を趁うて千峰萬峰を攀づるの幽興に耐ふの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に餘りしかども私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。この第三回の行はわれ遂に義友に背かざるを得ぬ、大阪を動り餘を逐きて古人の跡を踏まんと、自から意向を定めてありしかば、義友も遂に我に迫らず、遂に大阪の義獄に與らざりしも我が懷疑の所見朋友を失ひしにより大いに增殖し、その後幾多の苦獄を經驗したるは又是非もなし」（文庫版九四—五頁）と記してゐる。彼が政治から離れて行つた原因を、彼の思想の樣に、亦その他の事情に求めることが出來やうが、客觀的には上述のやうに期待したものが期待を反いたといふところに求められると思ふ。又この點に彼の文學の總ゆる特徵を規制するものを求めるのは間違ひであらうか。彼のペシミズムも、彼の內向性も、彼の主情性も、亦彼の烈々たる戰鬪精神をも。無論これらは飽まで彼のものであつたが、然し、それは又時代のものでもあつたと思ふ。

上述の安定期の性格を文學の分野內で論ずるならば、上述の「小說神髓」「浮雲」の出現後に於ても、文壇の主流となつたのは字句の彫琢に苦心を集中し、內容は當世向きの新古の折衷をこととした尾崎紅葉一派の硯友社であつたにも窺はれる。これに對し、透谷が、德川封建制下に於ては、文學の理想は粹と俠とにならざるを得ぬ必然性を論じ「粹と俠とは遊廓の腐風より生じ、遊廓を以てテンプルとなしたる事前に言へるが如し……當時の作家は概ね遊廓內の理想家にして且つ遊廓巡禮の寫實家たりしなり。彼等を高潔なる自然の意義より解釋せず、遊廓內の腐敗せる血淚中より之を面白氣に書き出でたる者にて、遊廓內の理想を世に紹介し世に欽慕したる者實に彼等の罪なり」（文庫四五頁）としてゐるのは、封建作家の戀愛觀＝人間觀を斷じてゐるのみでなく、紅葉のそれの原型として彈劾してゐるのである「戀愛は人生の秘鑰なり。戀愛ありて後人世あり」（文庫版二四頁）とする彼の主張を比較しみるべきである。又「吾人は記憶す、人間は戰ふ爲に生れたるを。戰ふは戰ふ爲に戰ふにあらずして戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを」（文庫版一四八頁）とする透谷の壯なる意氣と戰ふべき相手を見ふべきである。が同時に見逃し難いのは彼の論斷に溢れるペシミズムである。彼のロマンチズムの解放的な方向が同時に內省的な悲痛さを伴つてゐることにも時代の性格を看取すべきであらう。

論ずべくして至らないところ多く、意に滿たないが一應の結論をつければ、透谷の戰ひの意義は政治より退きて、進んで文學の世界に於て、人間尊重のために鬪つたことにある。彼の戰ひは勝利を得るには至らなかつたといふ意味で傷しくはあるが、その持つ意義に於ては飽くまでも前進的なものであつたのである。（昭和十七年一月十九日深更）

美といふこと

畫と文 齋藤正夫



私にとつて、描く事の喜びは、何ものにも勝る。それは〝私〟といふ身の中に立てこもる意味ではない。世界を觀、現實に觸れる、或る狂氣的な創造の世界である。そして美に對する信念が强ければそれ丈、表現の意力が將來に向けられ、過去に結びつく。それは歷史的な創造の世界に生きるよろこびでなくて、何であらう。

私は製作の時間を多分にはもつてゐない身である。だからといつて美を認得る世界に生きられぬ譯ではあるまい。藝術家が探りぬく眞中にも、私は大きな世界の創造として美を意識する。藝術家が技術の世界に神經をうばはれ趣味性と自意識を混同せんとする時、私は、私達の立場に於て踏みしめたオリヂナリティに邁進する。

生きぬいた表現といふものは、感覺の世界でも技術の世界でも、ましてや知性の世界でなどはない。それはプラトンの云ふ「神から贈られた狂氣」であるかもしれない。そしてこの狂氣は、創造の世界へ向けられた表現として歷史的精神性を沈潛させねばならぬ。

世界は今、贈られる程の苦しみにあえいでゐる。美の鑑賞性が、職業畫家等の感性と技術にまかせられなくなつて來てゐるのではないか。表現の意慾と苦しみが、自らの手で美を感得し、體得し、苦難して行くのでなければ、美を感ずる心を生活に置いて表現する事は出來ない筈だ。鍍金の表現技術を衣服の如く身につけ、美の知識を[illegible]として公開する畫家等の中に立つて私は誠實に畫面に苦難をかくし込んだ。それはデカルトの「よく隱るゝもののみよく生く」の言葉の樣に、靜かな世界を家庭を通して表現してみた。

これは物語つては居ない、描かれてはゐない。何か〝創られてゐる〟とみて頂ければ幸甚。

白夜

伊藤 鵠

怒、怒、怒、
怒を怒る怒を、怒る怒——怒！見よ狀ふべき宣託もなく、
聖戰よ、南方は恒に殉教に呆けて、危機は何處にも見當らなかつたが、圏外の和火、宿世の怨訊、ひとたびは此の衛さへも面を背けた、北方の慚忘るべき奇蹟もなくて、
嘗ては鎖されなかつた二つの窓に、研ぎ澄された瞳月の氷雨が、銀鋲の門を鍵かけるとき、嘗てはその前を跛選び去つた鹽や綴紳の映像も、物言はぬ化石となるだらう。嘗ては澱んだ人間の片言も、月の失意も、また嘗て、喰殺された白骨の上に、鈎懸の對照となるだらう。
森なる飛翔の果てに、舞踏の果てに、
、嘗ては捕逸した白夜の床に、俺も放免されて序文となる。

筆者紹介

【二面】
住田正一　國際汽船取締役
[illegible] 康　本學豫科敎授
高承 濟　本學先輩
小倉 忠　本學經濟學部學生
【三面】
菅 圓吉　本學文學部敎授
飯田堯一　本學文學部敎授
十河佑貞　本學文學部敎授
高松孝治　本學豫科敎授
飯塚浩二　本學經濟學部敎授
【四面】
河盛好藏　本學豫科敎授
水原 博　國際學友會勤務
杉木 喬　本學文學部敎授
龜山正二　東寶映畫錄音部勤務
齋藤正夫　先輩・新制作派所屬
田口次郎　本學經濟學部先輩
秋山徹夫　先輩・立敎中學敎諭
伊藤 鵠　本學先輩

或る迫力

——映畫エッセイ——

龜山正二

往々にして、長所が短所であつたり、短所が長所であつたりする場合がある。尙更らに轉じて、長所が同時に短所であつたり、短所が同時に長所であつたりする場合もある。

これは、一つの抽象が同時に進行した二つの具象的面を持つて居ると云ふことで、各對象に對する見方の相違ばかりではない。

此處に一つ、映畫に於ても同じ樣なことが見出される。

ニュース映畫などで、先づ第一番に我々の鼻につくのは寫眞（撮影）が汚ないと云ふ缺點である。然し同時にそれが汚なければ汚ない程、ニュースらしい獨特の雰圍氣を素晴らしく身近に感じさせて、我々を完全に魅了壓倒する場合を考へてみよう。

撮影する上に何らの技術的設備すらない場所で、あらゆる困難と危險の前に身を曝し乍ら、一瞬間に過ぎ去つてしまふであらう現實を即座に——出來る限りの敏捷さで——カメラに納めて行くと云ふことは、技術的にも肉體的にも並々ならぬ努力を必要とするに相違ない。まして、砲煙彈雨下の戰場などに於ては、彼等報道班員としてのカメラマンの努力は決外的なものであらう。

此の樣な環境にあつて、表現形式は、たつた一つの眼（カメラ）だけが許されてゐると云ふ狀態にあるのだから、當然技術の如何など言つて居る場合ではない。要するに、又と得難い對象を、人間としての全能力をあげてキャッチするのが使命であれば、此れは此れで何ら論ずる所なしである。寧ろ我々は、兵士に優るとも劣らぬ偉大なる努力と雄々しい精神とに感謝しなければならないと思ふ。

斯う云ふ彼等の、謂はゞ、逞しい國家的行動が、此の汚ない斷面の中から躍如として現れて來て、その當時の凄じいニュースの現實感を、カメラマンと同等に素早く呼び起させ、而も時間と空間を超越して、ぐん〳〵と我々を引きづつて行つてしまふに違ひないのである。一瞬間で永遠に過ぎ去つてしまふであらう尊い一斷片を、出來るだけリアルにキャッチすることが、先づ第一に我々を魅了せずにはおかない事由でもあらう。

畢竟するに、大きく謂へば映畫表現も、小さく謂へば技術表現も、更に映畫藝術も、なにもかも强要し得られない獨特の境地を、我々が無意識の內に許してしまつて、その代りに我々は一瞬間の中に畫面自體の內へ自分の感覺の一切をゆだねて、スクリーンの流れると共に、起つてゐる事の躍動も生々しく感じ、爆發する敵陣地の壯嚴さに呆然自失し、進軍する皇軍の武威に胸を躍らさずには居られなくなつて來るのではあるまいか。

斯く考へてみれば、畫面の汚ないと云ふ缺點が、時に我々を完全に魅了壓倒せずにはおかないと云ふニュース映畫に對する一見も、映畫的長所として認められるであらう。同時に我々が今まで絶えず求めて止まなかつたニュース獨特の世界から、更らに飛躍して、人間性や一般文化の、或ひはスリルの附屬として生れて來るであらう新しい現實を理解して行くことになるであらう。些少乍ら、こんな所にもニュース映畫の隆盛が考へられると思ふ。

三四日前、或る映畫館で見たのであるが、戰爭のニュースで、カメラの直ぐ前で砲彈が土砂煙りを噴き上げて大爆發する壯觀な場面があつたのを憶えてゐる。その時、カメラは爆發の震動で多分搖れたりしたのであらうか、爆發と殆ど同時の一瞬間に、ぶる〳〵ッと場面が震えて、誠に實戰らしい效果的なものであつた。

瞬間、この偉大なる迫力に對して、觀客は皆一樣にぶる〳〵ッと身體を震はせて、兩手に汗を握り、緊張した幾百幾千の眼が鋭く畫面にすえられて、戰爭と云ふ大きな雰圍氣の眞只中に、多分、暫らくは呆然と自己の存在すら忘れてしまつて居たであらう。（完）

幸福について

——一つの逆說的試論——

秋山徹夫

何が幸福であるかといふことをわたしはこゝで論じようとするのではない。幸福を擇ぶか不幸を擇ぶかは、各自の意思であるにもかかはらず、ほとんどすべての人々が絶えず幸福を追求する。また幸福を求めることが、あたかも人間の使命であり本性であるかのやうに信じて、そこにひそんでゐる矛盾や疑問を反省しようと努力することは、まれのやうである。この廣い世界には、自ら進んで不幸を求めてゐる人間もあるといふことを、氣づかないわけではなからうけれども、氣づいても知らぬ振りをしてゐる方が、もとより安全にはちがひない。不幸の世界へ踏みこんで、良心の苛責を感ずるなんてことは、恐ろしいことだ。知らぬ振りをしてゐれば、氣やすい生活が送れるのに、どうして自ら灯のなかにとびこむ蛾類のまねをする必要があらうか。しかしそれにも拘らず、さうした灯のなかで身を燒きこがされることを恐れない精神が、嚴然として存在することも事實である。幸福とは何であるかといふ幸福論よりも、かうした精神の持主が、何故幸福の世界を棄てゝ、不幸の世界に魅了されてしまふのかといふことの方が、今のわたしにははるかに興味がある。

幸福を論ずる場合には、人間は所謂「幸福」をもとめる生き物として假定されてゐるのが普通である。何しろ、それは二二が四といふ數學の公理のごとく、絶對的なものとして見做されてゐるので、それにたいして、うつかり口答へでもしようものなら大變である。しかし、幸福を擇ぶか不幸を擇ぶかといふことは、人間の意志によつて決定され、人間にはかういふ選擇の自由があるといふことの方が、もつとはるかに存在論的な問題ではあるまいか。

「二の二乘は、わたしの意志なんか無くたつて、やつぱり四になるんだからな。自分の意志となると、そんなものぢやありはしない！」「地下生活者」はかう云つて、人間に定められた二二が四といふ道を正直に踏んで行くのが厭さに、それと違つた骨の折れる苦しい不幸の道を、われから好んで强情に進んで行く。不幸を追求することは、身の破滅であることをみすみす承知しながらも、かれは敢へて自分の意志通りに振舞つた。このわがまゝともいふべき意志は、どんな地上の利益よりも、かれにとつては氣持が良いわけである。いかに倫理を說いても、相手が人間である以上、かういふ自由意志がそなはつてゐることは、どうにも除きやうのない宿命である。

かりにこの意志を人間から奪ふとしたら、それは、かれがもはや人間ではなくて、ピアノの鍵盤かオルゴールの釘みたいなものになつてしまふことを意味する。何故かといふに、ピアノやオルゴールの機構のやうに、人生が二二が四といふ合理的な法則にピッタリ適合して作られてゐるとするならば、かれにはもはや意志も精神もいらなくなつてしまふからである。しかし神の姿に似せて造られたといふ人間が、果してピアノの鍵盤やオルゴールの釘みたいなものになつて、滿足してゐられようか。二二が四といふやうやつは、全く人間を馬鹿にした代物である。

そのかはり、この二二が四こそ人間の生活を安易にし、幸福にしてくれるであらう。人間もまた幸福にならんがためには、意志も精神も棄てて、喜んでピアノの鍵盤になることをも厭はぬであらう。かれは何よりも生きることを恐れてゐるのである。人々は機械化された勞働と閑暇との半昏睡狀態のなかに、漠然と生きて行くことを好む。次第に腐つて行くのが、かれらの最上の幸福の理想なのである。

ドストイエフスキイはかういつた人種を蟲けらにたとへてゐる。このやうな人種に、多少のパンと娯樂とを與へて、滿足させてやることが、かれらにとつて最上の幸福であり、このやうな一般の幸福を建設するために、俺は煉瓦を一つ運んでゐるんだ、だから精神の慰安を感じてゐると、さう思つてゐる人道主義者、社會主義者、その他の何々主義者もまた人間を蟲けら扱ひにしてゐることは、言ふまでもない。

このやうな地上的幸福から人類を救つて、かれらに自己の自發性と天國のパンとを授けやうとしたのが、キリストであつた。キリストが荒野で石をパンに變へようとしたサタンの誘惑をしりぞけたのも、人間は蟲けらではなくて、魂の奧底に神のイメージを宿す神の子であり、その故にこそ、この人間の自發性を認めたからであつた。かれが自ら不幸をもとめて十字架上にかかつたのは、何ものにも換へがたいこの人間の精神を奪るに忍びなかつたからにほかならない。十字架に釘づけにされた眞理は、何人をも强制せず、何人をも壓迫しないであらう。われわれはこの神を奪つて、幸福を希ふ蟲けらになるか、苦惱によつて神を證ふイエス・キリストの道に從ふか、何れか一つを擇ばねばならぬ岐路にある。

これを想ふとき、天使ウルドピーズの次のやうな言葉のなかにはわれわれの胸を强く打たずにはおかないものがある。

「人が希つてゐる幸福が何と醜いことだらう。人が持つてゐる不幸が何と美しいことだらう」

良書推薦

川田熊太郎

一、本居宣長の「直比靈」と「葛花」
右は日本の神々を新しく見直すひとつのよすがとして讀まれたいものです。

田代秀德

一、阿部國治著 ふくろしよひの心
阿部國治著 まゐのぼり
（滿洲開拓者訓練所發行）
右二書は古事記入門書であるが單なる字義語句の解釋に留らず、神典に含まれたる深遠なる思想を平易に解釋した書として特に國土開拓の精神に燃える人々に推奬する。

山本 饒

一、肥後和男著 日本神話（弘文堂發行）
歷史家の立場より日本神話に盛られたる神話的眞實に關して要領よく敍述せられてある。

一、マイエル作「愛國者」（原名ユルク・エナッチュ）（世界文庫譯）

豐島 淸

一、深井英五氏著「回顧七十年」（岩波書店發行）
明治中期以降の我國民經濟の推移が、この達人の觀照を通して靜かに語られてゐる。その推移の中にあつて著者は身を以て實踐し、その實踐から「通貨調節論」以下の古典的な諸論策が生れたのであつた。この書は著者半生の滋味溢るる回顧錄といふよりも、更に我國金融界の興味深き裏面史といふよりも、むしろ我等後學の徒の以て學ぶべき實踐と理論との人間的融合の相を偲ばしめるものである。

鈴木圭介

一、フリードリッヒ・リスト著、正木一夫氏譯「ドイツ人の政治的國民的統一」（改造文庫、十六年五月刊）
われ〳〵は此のリストの「選集」ともなつた斷片的勞作の中で、彼が繰り返し繰り返しドイツに於ける國民的統一の必要性を極めて積極的に且つ執拗に說得してゐる態度に先づ魅力を感ずる。そして、彼をしてそれを爲さしめた當時のドイツの社會を考へないではゐられない。

一、島恭彥氏著「東洋社會と西歐思想」（生活社、十六年八月刊）
島氏は此の論文集の中で、啓蒙思想から古典學派へ、更に歷史學派・マックス・ウエーバーに至る西歐思想から東洋社會を觀直し、また逆に東洋社會から西歐思想を批判的に眺めてゐられる。特に歷史學派に對する著者の敍述は興味深いものがある。

MARUZEN MARUZEN MARUZEN
45 cc. 入
2オンス入
◎ 30 セン
ATHENA
鮮色一路を辿り——
品位向上に驀進する
國產第一線アテナ！
丸善アテナインキ
●高級で低廉な アテナ萬年筆●